Smart and Human
摂南大学

2025年度

摂南大学
現代社会学部
FAL演習
活動報告書

地域社会で活躍し、
その牽引役となる人材の育成をめざす

摂南大学現代社会学部

はしがき

本報告書は、2025 年度に実施した FAL 演習の活動内容およびその成果について取りまとめたものです。本演習は、2023 年の学部開設時より、大学における教育・研究活動を地域社会へと開き、企業、自治体、公益法人や関係機関・諸団体等の皆様との連携・協働のもと、実践的な学修の機会を創出することを目的として実施してまいりました。

今年度はFAL演習の３年目を迎え、昨年度よりも6件多い51プロジェクトが活動しました。演習に参加した457名の学生たちは、地域や現場が抱える多様な課題に向き合いながら、関係者の皆様との対話や協働を通して学びを深めていきました。必ずしも十分な知識や経験を備えた状態で臨んだわけではありませんが、現場での試行錯誤や振り返りを重ねる中で、自ら考え、行動し、他者と協力する力を着実に身につけていきました。これらの経験は、教室内の学修だけでは得難い貴重な学びであり、学生の成長に大きく寄与するものとなっています。

本演習が円滑に実施され、継続的な取り組みとして発展しているのは、連携先ならびに関係機関の皆様の温かいご理解とご支援の賜物です。日頃より学生の活動に親身にご対応いただき、専門的な助言や実践の場をご提供いただいていることに御礼申し上げるとともに、学生の未熟な点にも寛容に向き合い、共に考え、導いてくださったことに、心より感謝申し上げます。

今後も地域社会との連携を重視し、学生・教職員・連携先の皆様が相互に学び合う実践的な教育活動を推進してまいります。本報告書が、本演習の取り組みへのご理解を深める一助となれば幸いです。引き続き、変わらぬご指導とご支援を賜りますよう、何卒よろしくお願い申し上げます。

2026 年 3 月

摂南大学現代社会学部 FAL 委員会
谷めぐみ

目次

はしがき	1
1. FAL科目の概要と科目一覧	5
1）FAL科目の概要と特長	5
2）FAL科目の一覧	5
2. 数字でみるFAL演習	7
3. 2025 年度FAL演習活動報告	8
「元気高齢者」が集う公共施設でこれからの高齢者社会で何ができるかを考える	11
地域におけるさまざまな「居場所づくり」に取り組む	12
ステップファミリー当事者団体（SAJ）を支援しながら、社会問題を社会学的に考える	13
アフターコロナ時代の自治会活動継続のために	14
“うまくいく”人間関係をビデオ・エスノグラフィーから考えてみよう	15
夜間中学・識字教室における社会的マイノリティの学びの支援	17
多文化共生・神戸 1：在日コリアンが見つめる日本の姿を知る	18
多文化共生のまち、大阪を見つめる	20
奈良・御所から人と自然の共生を考える	22
壱岐ボランツーリズムから社会を考える	24
世界農業遺産の里山保全を通した地域の魅力発掘と発信	25
「村・留学」で考える地域社会と生活の未来	27
子どもの自然体験教室のサポーター	28
子ども食堂における子どもと交流	29
「子どもが輝ける地域づくり」に取り組む	30
学校にいけない・いかない子たちの居場所をつくる	31
子どもの声を聴く仕事　―困難な状況にある子どもを支援する現場を知る―	32
子どもたちの「自己実現」にともに取り組む	33
働く人々の地域コミュニティを体験するプログラム：ワーカーズコープ（その 1）	34
働く人々の地域コミュニティを体験するプログラム：ワーカーズコープ（その 2）	35
障害者ボランティア団体のイベント活動を SNS 発信する	36
交流人口・関係人口拡大、移住・定住者受入に向けた自治体の取り組みに関する調査	38
自治体 DX 推進による防災・関係人口拡大に向けた課題解決に関する調査	39
全国各地のまちライブラリーに関する調査とブックフェスタジャパン 2025 での報告	40
ネットメディアの役割と地域に根差した情報発信に向けたアプローチ	41
ロハスフェスタにおけるプロモーションの検討および実施	42
地方媒体企業における SDGs 活動への参加	43

兵庫県但馬地域の観光をテーマとした地域活性の課題と実践	44
FAL の FAL――学生による FAL 運営・広報チーム――	45
三重県のショッピングリハビリ関連地域活動に協力し、日本の未来を考える（事業構想系）	46
まちの魅力を探してみよう！	47
都市型公園の利活用を考える	48
街路をテーマとした梅田のまちづくりに参加する	49
地域とつながる観光の現場を知る	50
四條畷市田原地域における「地域主体のまちづくり」	51
フィールドスタディ（FS）への参加を通じて持続可能な地域づくりについて考える	52
産官学協働による地域課題解決	53
地域の図書館で「大学生がやりたいこと」を実現しよう	54
神社から社会を考える	55
球団「兵庫ブレイバーズ」への支援実践をてこに標準思考から脱皮する「試行錯誤社会学」	56
同窓会型スポーツのイベントマネジメント	57
バレーボールを通じた地域の賑わい創出とプロモーション活動	59
あなたの存在を、社会にとって価値あるものにする	61
工場はまちのエンターテインメントだ！―門真のものづくりの魅力を伝える	62
中小企業が抱える課題を”企業ドクター”として解決するためには	63
果物の生産と消費の現場を知る―果物好きの若者を増やしたい！	64
田舎暮らしと新しい働き方の探究・発信―「稲武-いなぶ-」で考える持続可能な地域とは	65
大阪の”凄い”中小メーカーの技術力を知ってもらい、次世代へ繋げる	67
東日本大震災・福島原発事故の被災地で考える「地域の未来」	68
能登半島地震被災地における復興支援ボランティア	69
「ふるさと門真まつり」を盛り上げよう―楽しいイベントの企画・運営のノウハウを学び、醍醐味を味わう	70
[参考資料]FAL（フィールド型アクティブ・ラーニング）科目の沿革	72

1. FAL科目の概要と科目一覧

1）FAL科目の概要と特長

FALとは、フィールド型アクティブ・ラーニング（Field-based Active Learning）の略称で、企業、自治体、公益法人等（連携先）と学生が協働し、 共有された目標の達成に向けて取り組むプロジェクトであり、FAL科目には「FAL入門」「FAL実践」「FAL演習Ⅰ～Ⅳ」が含まれる。FALについては、現代社会学部における学部教育の特長のひとつとしても挙げられており、学生に対する教育効果はもとより、連携先が抱える課題の解決という成果を創出することが期待されている。

FAL科目は、「体系性」「協働」「継続的な学び」「教員の主体的な参画」という特長をもつアクティブ・ラーニングである。

「体系性」について、後述のとおり、FAL科目では、入門科目としての「FAL入門」から提案力、修正力を身につける「FAL実践」、そして連携先と学生の協働的実践を目指す「FAL演習Ⅰ～Ⅳ」が開講されており、「1 年次はFAL入門とFAL実践でじっくりと準備をしたうえで 2 年次からFAL演習を履修する」「FAL入門でフィールドにおける活動の基本を再確認しつつ、1 年次からFAL演習で実践に取り組む」など、学生の想いや経験に合わせて履修方法を自由に選択することができる。

「協働」について、FAL科目では、連携先との「協働」をもっとも重要なキーワードとして位置付けており、学生は、受動的な態度で連携先と関わるのではなく、主体的（自ら考え、判断し、行動すること）、積極的（自ら進んで行動すること）にプロジェクトに参加し、連携先とともに考え、ともに汗を流しながら目標の達成を目指していく。

「継続的な学び」について、現代社会学部では、在学期間を通じてFAL科目を履修することができる。さらに学生は、4年間を通じておなじプロジェクトに参加して学びを深めることも、4年間さまざまなプロジェクトに参加して視野を広げることも可能である。

「教員の主体的な参画」について、各プロジェクトに1名以上配置される教員は、連携先および学生と積極的にコミュニケーションをとりながら、また自身も主体的に活動に参加することを通じて、プロジェクトの円滑な進行のサポートを行っている。

2）FAL科目の一覧

- FAL入門（1 年次前期）

学内で実施するFALへの入門科目である。本講義は、フィールドでの活動が未経験の学生に、現代社会を取り巻く現状と課題を知り、フィールドにおける活動に取り組むにあたっての心構えと課題発見、グループワークの具体的な手法を実践的に学ぶ機会を提供することを目的に開講する。またフィールドでの活動をすでに経験している学生にとって、FAL科目に取り組むにあたっては、自ら考え、判断し、行動するという主体性をもって参画することが重要であることを実践的に学ぶ機会となる。

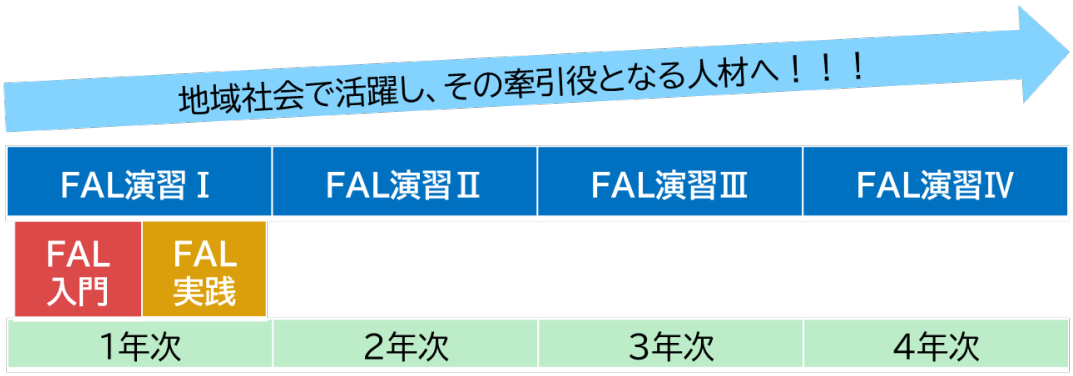
➢　FAL実践（1年次後期）

学内で実施し、FAL演習で必要になるより実践的なスキルの獲得を目指す科目である。講義の一部に連携先の担当者を招いて実施する。具体的には、「連携先からの課題提示→グループでアクションプラン作成・発表→連携先からのコメントを踏まえて修正→最終発表」といった内容に取り組み、提案力と修正力を学ぶ。

➢　FAL演習Ⅰ～Ⅳ（1～4年次通年）

学内外で実施し、1年次から4年次を対象に通年授業として開講され、企業、自治体、公益法人等（連携先）と協働し、課題解決取り組む科目である。

FAL 科目は、以上に示す体系的なカリキュラムにより、地域社会で活躍し、その牽引役となる人材を育成することを目的としている。



2. 数字でみるFAL演習

表1は、年度別実施プロジェクト数である。教員の活動フィールド、大学の近隣自治体などと、複数年度継続して連携するプロジェクトが多数を占めている。

表1　年度別実施プロジェクト数（件；カッコ内は不開講プロジェクトを含めた数値）

2023	2024	2025
41※1（50）	45（51）	51（54）

※1　統合して実施したプロジェクトを含む

表 2 は年度別の参加学生数である。

表2　年度別参加学生数（人）

2023	2024	2025
210	373	457

表3は、学年別の参加学生数である。今年度は1～3 年生の参加状況を示す。

表3　学年別参加学生数（人）

	1年生	2年生	3年生	4年生	合計
2023	210	—	—	—	210
2024	193	180	—	—	373
2025	235	140	82	—	457

表4は、プロジェクトあたりの平均参加学生数である。参加学生数の増加に伴い上昇しており、しばらくは上昇傾向が続くと予想される。

表4　プロジェクトあたりの平均参加学生数（人）

2023	2024	2025
5.12	8.28	8.96

※以上は、キックオフ時点でのデータをもとに算出している。

3. 2025 年度FAL演習活動報告

以下に、プロジェクト名および連携先、参加学生数を示す。

※2025 年 5 月 23 日キックオフ時点

No.	ジャンル	プロジェクト名	連携先	参加人数	担当教員
1	福祉	「元気高齢者」が集う公共施設でこれからの高齢者社会で何ができるかを考える	吹田市立高齢者いこいの家（株式会社ビゲンテクノ）	7	浅野
2	福祉	地域におけるさまざまな「居場所づくり」に取り組む	八幡市役所、八幡市社会福祉協議会、ほか	5	上野山
3	福祉	ステップファミリー当事者団体（SAJ）を支援しながら、社会問題を社会学的に考える	ステップファミリー・アソシエーション・オブ・ジャパン（SAJ）	3	樫田・竹中
4	福祉	アフターコロナ時代の自治会活動継続のために	八幡市役所・男山地区	15	小池・藤井
5	福祉	“うまくいく”人間関係をビデオ・エスノグラフィーから考えてみよう	敷島住宅株式会社	4	堀田
6	多文化	中国「残留日本人」とその家族のライフヒストリーから考える私たちの社会	中国「残留日本人孤児」を支援する兵庫の会	不開講	
7	多文化	夜間中学・識字教室における社会的マイノリティの学びの支援	守口市立さつき学園夜間学級、識字教室ひまわりの会	2	江口
8	多文化	多文化共生・神戸 1：在日コリアンが見つめる日本の姿を知る	一般社団法人神戸コリア教育文化センター	7	落合
9	多文化	多文化共生・神戸 2：多文化共生のまちづくりを担う	NPO 法人たかとりコミュニティセンター	不開講	
10	多文化	多文化共生のまち、大阪を見つめる	富田林国際交流協会、ほか	6	落合
11	自然	奈良・御所から人と自然の共生を考える	NPO 法人 NICE	6	落合
12	自然	壱岐ボランツーリズムから社会を考える	壱岐島おこし応援隊チーム防人	9	須藤
13	自然	世界農業遺産の里山保全を通した地域の魅力発掘と発信	徳島県東みよし町、西庄良所会、コミュニティ拠点 CO-MORI	9	谷
14	自然	「村・留学」で考える地域社会と生活の未来	PaKT company 合同会社	10	田中
15	子ども	子どもの自然体験教室のサポーター	ポレポレランド	10	稲生
16	子ども	子ども食堂における子どもと交流	SHO-HEI!!子ども食堂	11	稲生
17	子ども	「子どもが輝ける地域づくり」に取り組む	交野市福祉総務課、交野市社会福祉協議会	9	上野山
18	子ども	学校にいけない・いかない子たちの居場所をつくる	有田市社会福祉協議会	20	上野山
19	子ども	子どもの声を聴く仕事　―困難な状況にある子どもを支援する現場を知る―	司法面接トレーナーの会/司法面接支援室	6	田中
20	子ども	子どもたちの「自己実現」にともに取り組む	NPO 法人ろーたす	4	好井
21	労働	働く人々の地域コミュニティを体験するプログラム：ワーカーズコープ 1	ワーカーズコープ関西事業本部	9	浅野
22	労働	働く人々の地域コミュニティを体験するプログラム：ワーカーズコープ 2	ワーカーズコープ但馬地域福祉事務所	3	浅野

23	メディア	障害者ボランティア団体のイベント活動をSNS 発信する	公益財団法人阪喉会	5	藤井
24	メディア	交流人口・関係人口拡大、移住・定住者受入に向けた自治体の取り組みに関する調査	上市町役場	12	松本
25	メディア	自治体 DX 推進による防災・関係人口拡大に向けた課題解決に関する調査	真鶴町役場	12	松本
26	メディア	全国各地のまちライブラリーに関する調査とブックフェスタジャパン 2025 での報告	一般社団法人まちライブラリー（東京、大阪）	15	松本
27	メディア	ネットメディアの役割と地域に根差した情報発信に向けたアプローチ	株式会社 morondo（枚方つーしん）	3	横山
28	メディア	ロハスフェスタにおけるプロモーションの検討および実施	シティライフ、放送映画製作所	8	横山
29	メディア	地方媒体企業における SDGs 活動への参加	毎日放送	6	横山
30	メディア	兵庫県但馬地域の観光をテーマとした地域活性の課題と実践	朝来市・豊岡市	8	横山
31	メディア	FAL の FAL――学生による FAL 運営・広報チーム――	現代社会学部 FAL 委員会、学内の関連部署・団体	12	加戸
32	まちづくり	三重県のショッピングリハビリ関連地域活動に協力し、日本の未来を考える（事業構想系）	ショッピングリハビリカンパニー株式会社	23	樫田
33	まちづくり	まちの魅力を探してみよう！	松原市・松原市観光協会	12	中澤
34	まちづくり	都市型公園の利活用を考える	一般社団法人テラプロジェクト	15	中澤
35	まちづくり	街路をテーマとした梅田のまちづくりに参加する	㈱星田逸郎空間都市研究所	6	平山
36	まちづくり	地域とつながる観光の現場を知る	悠ツアー	5	平山
37	まちづくり	四條畷市田原地域における「地域主体のまちづくり」	四條畷市役所、田原支所	10	山本・藤井
38	まちづくり	フィールドスタディ（FS）への参加を通じて持続可能な地域づくりについて考える	飯田市役所、飯田市内企業、NPO など	9	後和
39	まちづくり	産官学協働による地域課題解決	シンク・アンド・アクト	5	竹中・樫田
40	文化	地域の図書館で「大学生がやりたいこと」を実現しよう	交野市立図書館	7	加戸
41	文化	神社から社会を考える	河内国一之宮 枚岡神社	5	須藤
42	文化	能勢町高齢者聞き取り FAL_「生活史インタビュー」＆「現地発表会」を地元の協力で実施	能勢なつかしさ推進協議会	不開講	
43	スポーツ	球団「兵庫ブレイバーズ」への支援実践をてこに標準思考から脱皮する「試行錯誤社会学」	兵庫ブレイバーズ	5	竹中・樫田
44	スポーツ	同窓会型スポーツのイベントマネジメント	全国高校野球 OB クラブ連合、ほか	21	谷
45	スポーツ	バレーボールを通じた地域の賑わい創出とプロモーション活動	枚方市市民活動課、ほか	18	谷・堀田

46	産業	あなたの存在を、社会にとって価値あるものにする	株式会社特殊高所技術	4	浅野
47	産業	工場はまちのエンターテインメントだ！―門真のものづくりの魅力を伝える	門真市産業振興課、門真市内の中小企業	10	加戸
48	産業	中小企業が抱える課題を”企業ドクター”として解決するためには	株式会社フォーバル	5	小池
49	産業	果物の生産と消費の現場を知る―果物好きの若者を増やしたい！	株式会社万果	8	中澤
50	産業	田舎暮らしと新しい働き方の探究・発信―「稲武-いなぶ-」で考える持続可能な地域とは	トヨタケ工業株式会社	7	堀田
51	産業	大阪の”凄い”中小メーカーの技術力を知ってもらい、次世代へ繋げる	大阪の各中小企業・キャリアセンター、ほか	8	山本・竹端
52	災害・防災	東日本大震災・福島原発事故の被災地で考える「地域の未来」	NPO 法人コースター、福島大学地域未来デザインセンター	12	江口
53	災害・防災	能登半島地震被災地における復興支援ボランティア	被災地 NGO 協働センター	10	江口
54	イベント	「ふるさと門真まつり」を盛り上げよう―楽しいイベントの企画・運営のノウハウを学び、醍醐味を味わう	門真市役所市民文化部地域政策課	16	堀田・竹端

プロジェクト名 「元気高齢者」が集う公共施設でこれからの高齢者社会で何ができるかを考える

連　携　先 株式会社 ビケンテクノ

参加学生数 1年生：７人　　担当教員 浅野慎一

1. 活動実施の経緯

「吹田市立高齢者いこいの家」や「門真市老人福祉センター」にて、介護や支援を必要とせず、心身共に自立している「元気高齢者」との交流を通じて、これからの少子高齢者社会や持続可能な地域社会のためにどのようなことが必要とされていて、自分では何ができるか、仲間とともにディスカッションし、実際に高齢者への講座企画・開催を行うこととした。
プロジェクトの目標として、①異なる世代の人と交流を通じて、社会的視野を広げる、②農業、防災、エコ活動等の日常生活ではできない体験、話を通して多様な知識を身につける、③利用者（高齢者）の人生経験を聞き、リアルな歴史や、生き方、考え方について学ぶ、④自分達が主体的に企画、参加し、自ら行動する力を身につけるという４つを掲げた。

2. 活動の内容

① 畑作業。太陽光クッキング。防災活動。
② バンパープール、モルック
③ カラオケ体操、詩吟
④ スマホ相談会
⑤ いこいフェスタ、阿波踊り、ダンス
⑥ 学生講座。ラジオ体操、紙風船バレー、しりとりリレー

3. 活動を通じた成果と学び（受講者の声）

・誰かのために何をすべきか考え、行動できるようになった。
・他の人の意見も尊重し、協働することが、苦手でなくなった。
・少子高齢社会に向けて、何ができるのか、何をなすべきか、体験的に考えることができた。
・エコ活動（菜園活動、太陽熱クッキング、ベランダ発電、堆肥づくり等）を通じて、持続可能な社会のためにどのような取り組みをしたらよいか考えるようになった。
・相手にわかりやすく言葉で伝えるにはどうすればいいのか、深く考えるようになった。
・原爆被爆者の高齢者から人生の歩みを聞き、戦争の恐ろしさ、平和の大切さを実感し、その体験や思いを若い世代が受け継いでいく必要があると思った。
・人との繋がりが健康と生きがいに直結するということを体験として実感した。
・積極的に話し、交流を重ねたことで、距離が縮まり、気持ちに寄り添え、コミュニケーションの力が身についた。
・異世代交流の重要性を改めて感じた。

プロジェクト名　**地域におけるさまざまな「居場所づくり」に取り組む**

連　携　先	社会福祉法人八幡市社会福祉協議会、社会福祉法人みつわ会、浄土宗 超泉寺、和歌山市地区社会福祉協議会、しんぼり子どもクラブ、はぐみ-YELL 砂山　ほか
参 加 学 生 数	1年生：2 人　2 年生：2 人　3 年生：1 人　　担当教員　　上野山　裕士

1. 活動実施の経緯

だれもが支えあい、活躍できる地域共生社会の実現に向けて、さまざまな連携先と協働しながら、大学生の「得意」を生かした居場所づくりに取り組んでいます。

2. 活動の内容

本年度は下記の活動に取り組みました。

活動内容	活動場所	おもな連携主体
親子の居場所づくり	京都府八幡市	八幡市、八幡市社会福祉協議会
コミュニティスペースの活用	大阪府寝屋川市	社会福祉法人みつわ会
ぼらポ子どもまつりの企画・運営	大阪府寝屋川市	寝屋川市社会福祉協議会
マルシェイベントでの防災講座	大阪府寝屋川市	浄土宗超泉寺
子どもの居場所づくり	和歌山県和歌山市	しんぼり子どもクラブ
今福おこしでのブース企画・運営	和歌山県和歌山市	今福地区社会福祉協議会
地域活動の広報プロジェクト	和歌山県和歌山市	和歌山市地区社会福祉協議会
地域交流イベントの企画・運営	和歌山県和歌山市	はぐみ-YELL 砂山
道掃除を通じた地域住民との交流	和歌山県紀美野町	地域住民
地域総合防災訓練	和歌山県紀美野町	地区自主防災組織

3. 活動を通じた成果と学び

さまざまな連携先とともに活動するなかで、まずは「連携先が大学生になにを求めているか」をしっかりと理解し、その想いに向きあうことのたいせつさを学びました。そのうえで、大学生として、自分の「特性」や「得意」を生かして連携先のためになにができるかを考え、実践してきました。もちろん大学生は未熟な部分も多々ありますが、大学生だからこそ、「私」だからこそできることを考え、実践することで、微力ながら地域に貢献することができたと感じています。

プロジェクト名	ステップファミリー当事者団体（SAJ）を支援しながら、社会問題を社会学的に考える
連　　携　　先	SAJ（ステップファミリー・アソシエーション・オブ・ジャパン）
参 加 学 生 数	1年生：1人　3 年生：2 人　　担　当　教　員　　樫田　美雄

1. 活動実施の経緯

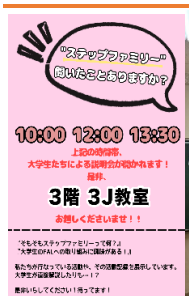
様々な家族があります．その中には，生物学的な親子関係にない子供と親の組み合わせを一組以上含む家族もあります，家族観次第の面はありますが，そのような家族がステップファミリーです．例えば，離婚後元のパートナーとは別のパートナーと同居を始めた親と実子がいた場合，「ステップファミリー」が形成されます．**SAJ は，2001 年に設立された当事者団体**です，ステップファミリーの出会う困難には，**社会学的困難の側面**があります，だから，野澤慎司（明治学院大学），菊地真理（大阪産業大学）等の社会学者と連携していました．樫田は野澤氏の大学院の後輩なので，抜刷を貰う関係ですが，それを読んで，FALにぴったりだ，と思い，野澤氏経由で，SAJ（連携先）様に繋がりました．

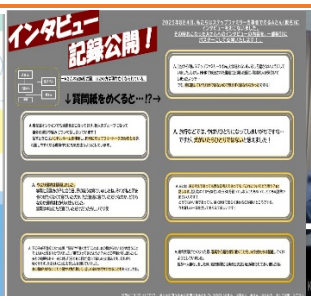
2. 活動の内容

SAJ の活動を支援するなかで，家族のことや社会のことを一緒に考えようとしました．知識も問題関心も不十分でしたので，まず，映画（福山雅治主演『そして父になる』（2013 年））をみました．ついで，SAJのWEBサイト内記事の精読をしました．京都にSAJ理事のサリーさんがいたので，ときどき大学にきてもらって，資料の説明を受けたり，当事者の家族関係のインタビューをしたりしました．仙台に SAJ代表の緒倉珠巳さんがいて，毎月の定例ズーム会議で支援してくれました．FALでオープンチャットを作り，情報交換をしました．大阪府や八尾市や大阪市や児相では，単発では取材に応じてもらえなかったのですが，寝屋川市の子育て支援課では担当の保健師の方に会えたので，取材をしました．9 月 5 日には，西寝屋川高校で成果発表をしました（写真の左端）．11 月 1 日と 2 日には，摂大祭に参加し，上述の関係者（野澤氏以外）を招いて，緒倉氏講演会とRTD（ラウンド・テーブル・ディスカッション）と展示をしました．1 月 23 日には「成果発表会」でプレゼンをしたところ，高得点でした．

3. 活動を通じた成果と学び

実際の団体活動は多面性を持っています．今回は，支援の形が明確に定まらなかったがために，様々な支援を模索した結果，社会的現象の多面性を学ぶことができました．これが一番の成果です．ステップファミリー支援は，行政との関係（多くの場合，母子家庭でも，貧困家庭でもないので，支援から漏れる），学問との関係（ステップファミリーの定義が流動性を持っている），当事者間の関係（親世代の活動が，なかなか子世代の活動につながらない）の夫々に，困難があって大変だ，ということがわかり，そのことの興味深さのある程度は「成果報告会」でプレゼンできました．支援がうまくいったという報告ではありませんが，社会問題の深層に触れ得たという報告にはなっていたと思います．





プロジェクト名　**アフターコロナ時代の自治会活動継続のために**

連　携　先　**八幡市役所**

参 加 学 生 数　1年生：2人　2 年生：7人　3 年生：6人　　担 当 教 員　　小池　高史

1. 活動実施の経緯

高齢化の進む住宅団地では、自治会の担い手不足により活動を継続していくことが難しくなってきています。交流会や年中行事などの中断を余儀なくされたコロナ禍をへて、かつての活動を再開することに困難を抱えている事例も見られます。このような課題を抱えている地域の一つが京都府八幡市男山団地の自治会でした。そこで、八幡市役所と連携し、男山団地自治会の皆さんと一緒に、夏祭りを運営する活動に取り組みました。取り組みの中で、お祭りのお客さんとして団地に暮らす外国籍住民が多く参加する様子を目の当たりにしました。彼らは、自治会には入っておらず、日本人住民との交流も少ないということでした。学生たちは、自分たちが手伝うだけではなく、団地の日本人住民と外国人住民をつなげていくことが大事だと気付き、多文化共生にむけたイベントを開催するようになっています。

2. 活動の内容

〇男山団地 B 地区夏祭り

昨年度から継続して男山団地 B 地区の夏祭りに参加しました。8月にあった祭り当日は、早朝の準備、夕方からの運営、翌日の片付けまで、B 地区自治会の皆さんに協力しました。お祭りの運営に参加しながら、来場者に秋に開催する多文化共生イベントのチラシを配布しました。夏祭りには、多くの来場者があり、大変盛況でした。

〇やわたすぽーつまるしぇ

11 月に八幡市役所と協働し、多文化共生イベント「やわたすぽーつまるしぇ」を開催しました。多国籍グルメが楽しめる運動会です。学生たちは、イベントの企画段階から参加し、おもに運動会で実施する種目を考えました。当日は、約 100 名の多国籍な参加者が集まり、盛り上がりました。学生は各チームのリーダー役として、日本人住民と外国人住民の交流を促す役割を果たしました。

3. 活動を通じた成果と学び

自治会の役員さんたちと一緒に活動するなかで、高齢者中心の限られた人数で自治会活動を行う大変さを感じ、自分たちにも力になれることがあることを理解することができました。同時に、地域でイベントを行うことの楽しさややりがいを感じることができました。地域住民と外国人住民が一緒に盛り上がるイベントを開催できた達成感が得られました。今後は、例年外国人住民の参加が多い他のイベントにも積極的に参加し、自治会や八幡市職員の方々と協力しながら、八幡市全体をさらに盛り上げていきたいと考えています。

プロジェクト名	“うまくいく”人間関係をビデオ・エスノグラフィーから考えてみよう
連　携　先	敷島住宅株式会社、有料老人ホーム「こもれび」
参加学生数　1年生：2人	担当教員　堀田 裕子

1. 活動実施の経緯

本学の研究・技術シーズ集をご覧になった敷島住宅株式会社様から、同社が運営する有料老人ホームにおける、入居者とスタッフのあいだに生まれる“うまくいく”関係性について調査・研究してほしいという依頼を受けたことが、本活動の出発点です。今年はじめて FAL として実施しましたが、FAL であっても内容はれっきとした「研究」です。

とはいえ、調査研究が初めてという学生がほとんどであるため、調査方法については要点を押さえて短時間で学び、すぐに現場での調査に取り組む流れになりました。調査後はデータセッションを重ね、最終的に現場で働くスタッフの皆様へ成果を還元し、報告書（論文）としてまとめていきます。

2. 活動の内容

（1）質的調査の方法についての学修

ビデオ・エスノグラフィーのほか、インタビューや参与観察の手法など、さまざまな質的調査について短時間で実践的に学修します。

（2）プレ調査・本調査

ビデオカメラと IC レコーダーを数台ずつ、現場の人びとにできるだけ意識させないように設置し、調査をします。撮影中も、時間と出来事をメモしながら観察します。

（3）トランスクリプション

撮影データを文字起こしします。会話だけでなく行動も文字に起こすことで、場面をより理解しやすくなります。

（4）データセッション

トランスクリプトを手元に、撮影したデータを繰り返し見ながら、当事者の会話や行動の意味を意見し合います。

（5）報告

ある程度の「発見」と「考察」ができたところで、現地のスタッフさんたちの前でプレゼンします。

3. 活動を通じた成果と学び

FAL スタート時は学生 4 名でしたが、さまざまな事情により、年度途中から 1 年生 2 名での活動となり、FAL の継続が危ぶまれる場面もありました。それでも、予定していたすべての活動を無事に実施することができました。しかも、3人共著で論文を執筆することもできました。

調査経験がない状態からのスタートで、当初は得られたデータのどこをどう見ればよいのか全くわからない状況でした。しかし、データセッションを重ねるうちに少しずつ視点が育ち、さまざまな「気

づき」が生まれていきました。私たちは「見られているのに気づかれていないこと（seen but unnoticed）」に目を向けられるようになることを目標に進めていましたが、最終的に導かれた分析結果はまさに「見られていたのに気づかれていなかったこと」を明らかにするものでした。現地スタッフの皆さんへのプレゼンでは、「確かにそうだ」「調査してもらって初めて気づいた」といったコメントをいただき、大きな励みとなりました。

さらに、視覚的な気づきが得やすいビデオ・エスノグラフィーの実践については、今後増えると予想される介護現場での外国人労働者向け教材としても活用できるのではないかという新たなアイデアも寄せられました。

プレ調査の様子。事前に、スタッフの方々に仕事内容や介助において気をつけていること、入居者様の状況などについてインタビューしました。

本調査の様子。入居者様にも調査について簡潔に説明して、ご協力をお願いしました。

現場スタッフの皆さんとのデータセッションおよびプレゼンの様子。自分たちの調査研究の成果を、少しでも現場に還元できたことをうれしく思います。

作成したトランスクリプトの一部。このおかげで、距離を置いてデータを見ることができるようになります。

プロジェクト名　**夜間中学・識字教室における社会的マイノリティの学びの支援**

連　　携　　先　**守口市立さつき学園夜間中学・識字教室ひまわりの会**

参 加 学 生 数　1年生：2 人　3 年生：1 人　　担　当　教　員　　江口 怜

1. 活動実施の経緯

夜間中学は、年齢や国籍を問わず、子ども期に基礎的な教育を十分に受けられなかった義務教育未修了者や、不登校で十分に学校に通ってなかった形式卒業者、渡日して日本語学習や基礎的な学びを必要とする外国人等が学ぶ学校である。守口市で 50 年以上存続してきたさつき学園夜間中学と連携し、日常的な学習や行事等をサポートしながら、社会的マイノリティの置かれた現状や課題、多文化共生社会の実現のために必要なことなどを考えるためにプロジェクトを開始した。今年度も、新たに、神戸市の識字教室ひまわりの会との連携を構想していたが、活動拡大には至らなかった。

2. 活動の内容

さつき学園夜間中学には、10 代後半から 90 代まで、多様な年代・国籍の生徒 156 名が在籍している。生徒の国籍は 17 に上り、中国、ネパール、日本が特に多い。今年度は、主に金曜日の 1～3 時間目の日本語学習を基本とするクラスのサポートに参加した。来日したばかりでほとんど日本語があまりわからない生徒とも翻訳アプリなどを通して関わりをもつことができた。

今年度は、秋の校内新入生歓迎会、校内ミニ運動会、地域中学生との交流会、交通安全学習などの行事にも共に参加することができた。

3. 活動を通じた成果と学び

まず、ほとんど知られていない夜間中学という学びの場にいる人々との出会いを通して、十分に教育を受けることができず日々困難を感じている社会的マイノリティの存在を知ることができた。人に何かを伝え、教えることの難しさと、学びの喜びを感じる機会にもなった。

特に、今年度参加した金曜日は学校行事が多く、例えば昼の中学生と夜間中学生が「原爆ドーム」を題材に平和学習を行う場面を共有し、海外出身の生徒も日本の中学生も「平和への願い」は同じであると学んだ、歌などを通した交流が「心のバリアフリー」の実現に寄与することを学んだなど、夜間中学の学びの多面性について理解を深めることができたようだった。

次年度以降も、生徒の置かれた歴史的・社会的な背景に関する理解を深めながら、大学生ならではの支援のあり方について模索していきたい。

プロジェクト名　**在日コリアンが見つめる日本の姿を知る**

連　携　先　**一般社団法人コリア教育文化センター**

参加学生数　1年生：7人　　担当教員　落合　知子

1. 活動実施の経緯

一般社団法人神戸コリア教育文化センターは①神戸在日コリアン保護者の会と②神戸在日コリアンくらしとことばのミュージアムの2つのプログラムを運営しています。

2025年度はこの2つのプログラムに3名と4名の二チームに分かれて活動を展開し、適宜、活動報告を行いました。

① 神戸在日コリアン保護者の会に参加した3名は毎週土曜日の子どもたちへの継承語・継承文化教室オリニソダン（子どもたちの寺子屋）に参加し、12月のオリニマダン（子どもたちの庭）と呼ばれる民族文化発表会の運営に携わりました。

② ミュージアムに参加した4名は不定期でイベント開催に向けミュージアムで学びを重ね、11月には学生提案のイベントを開催し、その様子を動画に収めました。またオリニマダンの日は取材に出かけ、オリニマダンに過去に参加したことのある OB のインタビューを動画にまとめました。

一連の活動から現在を生きる在日コリアンルーツの子どもたちとその周囲の大人たちによるコミュニティが何を目指して活動しているのか、学ぶことになります。

2. 活動の内容

オリエンテーションとして7月27日に新長田の街歩きのフィールドワークを行いその後、神戸コリア教育文化センター代表理事のキムシニョンさんの講演会を聞きました。

その後、神戸在日コリアン保護者の会の活動に参加したチームは8月のサマープログラムでの料理教室などの活動を経て12月・11月と毎週土曜日の子どもたちの活動に参加し、12月7日のオリニマダンの運営に早朝から参加しました。ともに活動を支えた神戸の人権教育を担ってきた先生たちからも様々な学びを得ました（次項参照）。

ミュージアムでの活動に参加したグループは AR（拡張現実）を用いた街のモニュメントの展示作りに挑戦し、11月には神戸大学の学生グループとともに企画した韓服とアオザイを着て長田のまちを買い物をしよう！のイベントを開催しその様子を動画にまとめました。また12月のオリニマダンに参加し、オリニマダン参加経験のある OB のインタビュー動画を作成し、民族文化を発表することに対する揺れる思いを動画作品にまとめて成果報告会で発表しました。

3. 活動を通じた成果と学び

神戸在日コリアン保護者の会の活動に参加したメンバーはそこでの学びを下記のように語っています。

＝＝＝＝＝

普段の学校生活でその子たちが自分のルートを安心して出せる場所がないので、隠したり薄めたりしています。

そんな子どもたちが「説明しなくていい」「変にみられない」「同じ背景を持つ人がいる」再確認できる貴重な場で誇りを持つ練習の場にオリニソダンはなっています。

大事なのは機会の平等を埋めることだと感じました。

多数派の文化はわざわざ場を作らなくても自然に行うことができますが、少数派の場は発表する機会がそもそもありません。

民族教育の場やその発表の場は「特別扱い」ではなく少数派にとってもそれは、同じく大切なんだよと彼らや僕らもしかしたら先生にも教える場であると考えています。

＝＝＝＝＝＝

プロジェクト名　**多文化共生のまち、大阪を見つめる**

連　携　先　**富田林国際交流センターほか２か所**

参加学生数　1年生：1人　3年生：2人　　担当教員　落合 知子

1. 活動実施の経緯

本プログラムでは下記の3つの活動を通して大阪の街にある様々な多文化拠点から多文化なまち大阪をみつめ直すこと狙いとしています。支援される外国人住民だけでなく、そこに集う支援する日本人、支援する側に回った外国ルーツの人など様々な人と出会い。多文化共生とはだれのためのどんな活動なのかを理解することを目指しました。

富田林国際交流センターにおいては外国人児童の学習支援や居場所つくりをするサマースクール、モザイクキャンプを実施し、そこに富田林市の教員初任者研修を兼ねて新人教員が参加しています。そこに大学生ボランティアとして参画することで子どもたちの学びと教員の学びを同じ目線で見つめることができるプログラムとなっています。

せっつ地球村は子どもたちの居場所つくりと同時に地域の人々に国際交流の楽しさを実感してもらうために様々なイベントを行っています。大学生も摂南大学だけではなく、いくつかの大学生が参加し、協働の場を作っているのが特徴です。

猪飼野セッパラム文庫は大阪コリアタウンの奥にある朝鮮半島と在日コリアンに関わるまちのアーカイブです。そこで行われる日本語教室を支援しながら、参加学生は企画に関わることが期待されています。

2. 活動の内容

① 富田林国際交流センター：7月末の4日間にわたるサマーキャンプ、9月中頃の1泊2日のモザイクキャンプこのふたつの活動に参加することで、富田林の外国人市民や子どもたち、それを支えるボランティア団体と新人教員の輪に入り、外国にルーツを持つということ、それを支援するということを肌で感じ、多文化共生の中身を理解することを目指しました。さらにクリスマス会（12月24日）や小正月（2月13日）の行事への参加をすることで活動のレギュラーメンバーとなってメンバーとしてのアイデンティティを形成するとともに学修を深めることが期待されました。

② せっつ地球村：8月開催のムスリムの魅力発信イベントで茨木モスクの皆さんと休日を過ごし、ムスリムの祈りや食事を共に経験することで、日本に暮らすムスリムの人々の生活実践を学びました。また11月の KOLIYAMA 多文化つながりフェスの企画と当日運営に関わり、地域住民を巻き込む多文化イベントをいかに魅力的に運営するかを学びました。

③ 猪飼野セッパラム文庫では毎週金曜の夜に行われる地域の外国人住民の丹家の日本語教室に参加し、具体的に外国人住民が何に悩んでいるのかを学び、ともに地域を形成する住民としてできることを考えました。

3. 活動を通じた成果と学び

多文化共生とは教室で学ぶよりも日々の実践の中で外国人住民、日本人住民問わず、そこにいるすべての人々の関係の上に蓄積されるものであることに気づきました。例えば、富田林のサマースクールでは開始前の7月11日の教員研修に参加させてもらい、新人教員の皆さんと日本で暮らす外国の子どもたちの問題点を共に学び、サマースクール後の振り返りでも「学校で見たことのない子どもたちの姿を見た」と先生たちが語っていたのが印象的でした。

せっつ地球村ではイベント当日だけではわからない準備の大変さを見たうえで KOLIYAMA 多文化つながりフェス当日を迎えたので、参加の仕方で見えるものも異なることが分かりました。
また今回の参加メンバーには現代社会学部唯一の留学生も参加しており、来年度も現代社会学部に正規留学生が入らないことが分かったので、少数派として異文化の中で不安を感じる気持ちは他人事ではありませんでした。「隣にいる人」として理解し、されることが大切であるということを強く感じる経験でした。

プロジェクト名　**奈良・御所から人と自然の共生を考える**

連　携　先　**杉浦農園、および NPO 法人 Nice**

参 加 学 生 数　2 年生：6人　　担 当 教 員　落合 知子

1. 活動実施の経緯

奈良県御所市の「杉浦農園」では、2003 年から無農薬栽培による環境保全型農業に取り組んでいます。高齢過疎化が進む御所において、農業の継承者の不足は大きな問題です。杉浦農園には国内外から年間500人の若者がワークキャンプに参加し、有機農業のサポート（夏野菜の収穫、畑や田んぼの整備など）を通して、持続可能な農業と食の安全、地域活性化について考えます。2017年から神戸大学の学生の国内研修先として学生派遣が行われてきました。2025年度は摂南大学の学生6名と神戸大学の学生3名によるワークキャンプとなりました。

2. 活動の内容

2025年度本プロジェクトの FAL に参加した学生は9月 20 日から 27 日に奈良県御所市にある杉浦農園にて泊まり込みで農業を体験しました。実は昨年度の参加者が全員再び申し込んできたのでした。昨年は暑くてきついと大変不満を言っていたのになぜ2回目に挑戦したのでしょう？「友達と大自然の中で農業に取り組む経験は大阪では経験できないことで、また再び体験したくなった！」とのことでした。去年は摂南生 9 人と神戸大学 1 人だったのですが、今年は神戸大学の人が 3 人になり、神戸大学の人と話す時間も長くなり仲良くなることができたのも大きな収穫だったそうです。

また活動の様子は奈良県に取材を受け、奈良県の公式 HP に下記のように掲載されています。

https://www.pref.nara.jp/secure/300291/interview no6.pdf

3. 活動を通じた成果と学び

今回は2年生後期での参加で農村社会学を研究するコミュニティ論ゼミ（藤井先生ゼミ）に進んだ学生もおり、農業をしながら、滅びない農村の秘訣について藤井先生へのインタビューを行いかつ下記のように考察をしています。

日本の農村は「高齢化・人口減少」で消滅の危機にあります。しかし、実際には“うまくいっている農村”も存在します。農村の危機の主な原因は

＊若者の流出・後継者不足

＊農業収入だけでは生活が不安定

＊地域のつながりの弱体化

等が挙げられますが、成功している農村の共通点には

＋若者・外部人材を受け入れる農村
＋新規就農者・移住者を歓迎
＋地域ぐるみでサポート
＋「よそ者」を排除しない文化
上記のような点があると言います。

杉浦農園も御所の集落も僕らを暖かく迎え入れてくれました。そのうえで「住環境・子育て支援」「教育・交通・医療への配慮」「地域コミュニティの維持」が若者を呼び入れるためには必要であることを学びました。

農業の大切さを未来に伝えるためにも農村の存続とうまく行く方法を考え続けていきたいです。
（成果報告会より）

プロジェクト名	**壱岐ボランツーリズムから社会を考える**
連　携　先	**壱岐島おこし応援隊チーム防人（ボランティア団体）**
参加学生数　１年生：３人　２年生：６人	担当教員　須藤　遙子

１．活動実施の経緯

壱岐市委託事業である海岸漂着ゴミ発生抑制対策「ボランツーリズム in 壱岐」は、2025 年で第 15 回となる歴史あるイベントです。摂南大学としては 23 年度から参加しており、今年で３回目。市内の中・高生約１５０人に加え、五島、対馬、長崎など島外ボランティア団体が集まります。外洋に浮かぶ壱岐島には、海流の影響で国内外から大量のゴミが漂着します。そのゴミを拾いながら、プラスチックゴミについて知り、離島の観光もしつつ地球環境を考える取り組みです。

２．活動の内容

【6 月 27 日】福岡市東区西戸崎の海岸で、海洋ゴミ清掃をしました。夜は、博多で一泊。

【6 月 28 日】博多港よりフェリーで壱岐島へ。今年は別のボランティア団体が前週に清掃を行った影響で、ほとんどゴミの無い状況…。快晴のなか、壱岐の美しい海岸を堪能できたのは良かったですが、清掃に協力できず少々残念でした。夜の交流会では、バーベキューをしながら他大学の学生らと交友を深めたり、社会人の方のお話しを伺ったりと、有意義な時間を過ごしました。

【6 月 29 日】例年どおり、一支国博物館にてシンポジウムに参加。その後のワークショップでは、事前に依頼されていた昨年の活動発表を行いました。午後は、バスで島内観光へ。前日ゴミ拾いが出来なかった分、初めて観光名所「鬼の足跡」の崖下までロープで降り、子どもくらい大きな浮きなど大きなゴミをたくさん拾い、それをロープで引っ張りあげるなど、充実した活動となりました。

【10 月 19 日】昨年同様に海洋ゴミとの比較のために、大阪海さくら主催の淀川ゴミ拾いに参加しました。壱岐のような大型漁具等のゴミが無い一方、ペットボトルや弁当ガラのような生活ゴミが目につきました。少し前に開催された花火大会のゴミなどもありました。

【11 月 28 日】摂南大学 50 週年イベントの一環でもある第 84 回 KNS 定例会 in 摂南大学枚方キャンパスに参加。本学他学部の教員・学生をはじめ、多くの一般参加者の前で発表しました。

３．活動を通じた成果と学び

国境に近い壱岐島で海洋ゴミ拾いのボランティアを行うことで、特にプラスチックゴミの深刻な影響を、身をもって体験します。海洋ゴミの研究を専門とする他大学の先生のお話を聴くのも、貴重な機会となります。また、九州大学留学生、佐賀大学や長崎大学のボランティアサークル、社会人ボランティア団体らとの交流で、コミュニケーション能力を磨き、授業では得られぬ知識を得ていました。

プロジェクト名	**世界農業遺産の里山保全を通した地域の魅力発掘と発信**
連　携　先	**徳島県東みよし町産業課、コミュニティ拠点 CO-MORI、西庄良所会**
参加学生数	1年生：3人　2年生：2人、3年生：4人
担当教員	谷 めぐみ

1. 活動実施の経緯

徳島県のにし阿波エリアは、世界農業遺産や日本ジオパークに認定された自然や文化、地域資源に恵まれた土地でありながら、その魅力はまだ十分に知られていません。また、その価値が地域外に届ききらず、共感の輪や新たな関係性が広がりにくいことが課題となっています。こうした背景の中で、本プロジェクトでは「にし阿波の魅力を見つけて、届けて、未来へ繋げる」という理念を実現すべく、東みよし町の豊かな自然の中で育まれた食文化や生活文化といった地域資源を次世代に継承していくために、大学生と連携先が協働・共創しながら地域の課題解決に取り組んでいます。

2. 活動の内容

2025 年度は東みよし町内で主に下記の活動に取り組みました。

〇世界農業遺産の傾斜農地における蕎麦刈り体験（6月21日～23日）

東みよし町西庄地区の活性化に取り組む西庄良所会と一緒に、春蕎麦の収穫に取り組み、傾斜地における伝統農法の一端に触れることができた。また農作物を荒らす獣害の現況と捕獲した猪肉を食すことを通して、農耕の大変さと日々の食事が得られる有難さを学んだ。

〇にし阿波いちごタウンプロジェクトの実践的な学びと中学校への出前授業など（9月5日～9日）

夏秋いちごの栽培農場の見学と収穫後の選別体験を通して、今年度から始動したにし阿波いちごタウンプロジェクトの取り組みについて理解を深めた。また町内のフィールドワークに取り組み、地域事業者や団体へのインタビューならびに阿波踊りの観覧を通して、地域課題や伝統文化に触れることができた。さらに中学3年生の社会科の授業において、地元の子どもたちが考える町内観光の魅力発信に関する出前授業に取り組んだ。

〇菓子工房みかもんへのインタビューと座談会の開催（12月12日～14日）

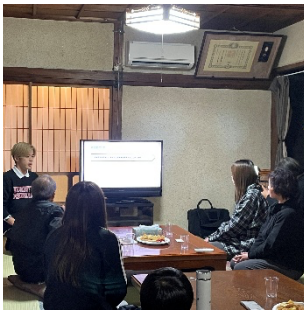
今年度の活動で得た地域課題の解決策の一つとして、地域ブランディングの強化に着目し、次年度から菓子工房みかもんとの協働による商品開発と魅力発信に取り組むべく、半構造化インタビューを実施した。また活動拠点である CO-MORI において、地域の方々と座談会を行い、東みよし町の現課題と発展可能性について意見交換した。

3. 活動を通じた成果と学び（学生のコメント）

- 地域の方々との交流を通して、様々な学びを得ることが出来たこと。自分達にない考え方を得ることが出来た。
- 同学年よりも下の学生が多かったので、特に1年生とたくさん話すように意識しました。地域の活動では、産直の方や飲食店で働いている方にインタビューをし、課題をたくさん学ぶことができた。インタビューをするなかで、具体的な課題を聞き出す力がついたと感じました。
- FAL 演習をとおしたことで、大学外での直接的に感じる学びを経たことで、今までにない経験が

出来ました。実際に東みよし町へと足を運び、外からの視点としての魅力や課題を探ることで、今までにあがっていた課題や若者視点での新たな課題、東みよし町内に留まっていた素敵な魅力を発掘することは、学びの視野を広めることに大きくつながり成長できたと感じることができました。

- FAL 演習の活動を通して、地域の魅力を発信するために私たち学生ができることは何があるのだろうか、何を見つけて発信することができるのかを考えました。自分たちで東みよし町の魅力を探しどういう場所にどういう魅力があるのかを必死に考えました。こういった活動に参加するのはほぼ初めてだったため自分たちで考えて行動していくという積極的な力が備わったと思いました。
- 外部の方と積極的に関わり、見識を広げること、リーダーとして計画を立てていく力が身についたなと感じます。
- プレゼン発表やインタビューを行う力。
- 自分たちのひとつひとつの行動がしっかりと結果になっていくのがとても嬉しかったです。偏見が多い中で自ら現地へ行って地域の現状を知ることで問題解決について考えるきっかけになった。



プロジェクト名	「村・留学」で考える地域社会と生活の未来
連　携　先	PaKT company 合同会社
参加学生数	1年生：1人　2年生：8人 3年生：1人
担当教員	田中　晶子

1. 活動実施の経緯

PaKT が運営する「村・留学」は、学生たちが日本の農村地域に滞在し、現地の生活を体感し、持続可能性について学ぶプログラムです。

2. 活動の内容

キックオフミーティングでの顔合わせ後、事前学習としてオンライン勉強会に参加した学生もいました。その後、五ヶ瀬（参加者2名）・久多（参加者2名）・吹屋（参加者6名）に分かれ、「村・留学」プログラムに参加しました。

【五ヶ瀬】五ヶ瀬に暮らす人々との交流や五ヶ瀬の自然に触れ、普段の生活の中では体験出来ないことやものに触れました。

【久多】住民の方や移住者の方との交流を深めつつ、久多における松上げ、花笠踊りといった地域の伝統的な祭りに参加しました。

【吹屋】エコビレッジ・パーマカルチャー・循環の暮らし・仲間づくり・拡張家族をテーマとし、吹屋の人々との交流やサスティナブル講義、ブドウ収穫やうどんづくり、陶芸体験などに参加しました。

3. 活動を通じた成果と学び

【五ヶ瀬】五ヶ瀬では、地域の方々の温かさに触れることができた。その中で、人生観や宗教観について、祇園神社神楽の歴史のお話などを聞かせていただきました。有機無農薬の茶葉を使ったオリジナルのお茶づくり体験や五ヶ瀬の雄大な自然にも触れ、普段の生活とは異なる環境で様々な体感することが出来ました。

【久多】松上げや花笠踊りなど地域での行事への参加を通して、地域の人々と交流しました。参加学生は都心部の生活経験しかなく、村に 9 日間過ごすことに不安も感じていたが、村の人々の温かく迎えていただいたことや、久多村ならではの祭りや自然豊かな環境に触れ、充実した 9 日間を過ごすことが出来ました。

【吹屋】留学期間を通して、普段過ごしている都市とは違い、吹屋では人と人との距離がとても近く顔を合わせれば自然に会話が生まれる環境があることを知りました。また、血縁や婚姻関係にとらわれずにお互いを支え合う関係を築く新しい家族の形（拡張家族）とい関係の在り方に触れ、「繋がり」と「優しさ」の循環を感じました。持続可能な社会にするため、循環な暮らしの大切さを再認識する体験となりました。

プロジェクト名	子どもの自然体験教室のサポーター
連　携　先	ポレポレランド
参加学生数	1年生:3人　2年生:7人 3年生:2人
担当教員	稲生　勝

1. 活動実施の経緯

子どもの自然体験教室は、全国的には、こどもエコクラブとして登録してある団体、登録していない団体を含めそれなりに普及してきているが、学校単位が多く、地域の子どもの自発的な参加を旨とする団体はそれほど多くはない。

ポレポレランドは、元農地を拠点にし、農作業を含め、多くの自然体験活動を実施している。また、同志社大学の学生ボランティアなども参加し子どもの自然体験をサポートしている。

2. 活動の内容

基本的には、毎月 1～2 回、いずれかの土曜日に活動しているが、気象条件や自然の季節性など、あるいは、こどもの都合などで必ずしも土曜日とは限らない。

特徴的な活動としては、外来種で、在来のイシガメの減少ともかかわっているなどともされ、日本の生態系破壊をもたらしているミシシッピーアカミミガメのたい肥化をするなどして、自然保護を子どもに考えさせたりしている。

3. 活動を通じた成果と学び

子どもの自然体験をサポートする中で、現在の子どもたちの自然に対する感性などを知ることができるとともに、環境問題を考えるきっかけとなっている。

自然に対する感性的認識や自然科学的な知識が不足しているのは、子どもたちばかりでなく、現代社会学部の学生も同様であり、子どもたちとともに、自然保護や環境問題に関する初歩的な知識を得る機会ともなっている。

そして、自然体験の不足が子どもにどのような影響を与えるかについても考える機会となっている。

プロジェクト名　**子ども食堂における子どもと交流**

連　携　先　**SHO-HEI！！子ども食堂**

参加学生数　1年生：7人　　担当教員　稲生 勝

1. 活動実施の経緯

今日、貧困はますます拡大し、こどももその被害を受けている。食事が満足に摂れない子供も増加している。そのような状況の中、全国的に子供に食事を提供しようという子ども食堂が実施されてきている。そして、子ども食堂は、子どもの居場所づくり、子ども同士の交流の場の意味も持つようになってきている。寝屋川市においても、子ども食堂の活動が始まり、子どもの居場所としても機能している。子ども同士の交流に加えて、大学英も加わることで、こどもの活動が大きく広がる。大学生は、現代の子どもの様子、状況を経験として認識できるようになる。

2. 活動の内容

毎月、第 2 日曜日、または、第 3 日曜日に子ども食堂は開催され、食事の準備は、午前 9 時ぐらいから始まり、食事は、11 時ぐらいから13時ぐらいとなっていて、その前後で、子ども同士や子どもと大学生の交流がなされた。具体例を挙げると、図書館から借りだした紙芝居の読み聞かせ、竹筒を用いた水鉄砲づくり、音楽の演奏、歌などである。

3. 活動を通じた成果と学び

大学生は、現代の子どもの様子を、経験を通じて、つまり、こどもとの交流の中で楽しみながら知ることができた。また、子ども食堂のスタッフが高齢な方が多い中で、こどもにとっても比較的、年齢の近い大学生との交流は、体力的にも精神的にもしやすく、有意義なものであった。

ただ、大学生にとって、子どもの貧困そのものは、事前学習で理解してあったが、子ども食堂の現場だけでは、直接的には、看取しにくく、事前学習の意義が大きかったように思われる。

プロジェクト名　**「子どもが輝ける地域づくり」に取り組む**

連　携　先　**交野市福祉総務課・社会福祉法人交野市社会福祉協議会**

参加学生数　1年生：6人　2年生：3人　　担当教員　上野山　裕士

1. 活動実施の経緯

「だれもが安心して暮らせる福祉のまちづくり」をめざして、子どもたちを対象とした活動を中心にさまざまな地域福祉活動に取り組みました。

2. 活動の内容

活動内容
夏休みの子どもの居場所づくり 校区福祉委員会を中心に開催される夏休みの子どもの居場所づくり活動で、勉強や工作、遊びの見守り、サポートを行いました
ICT講座 地域でボランティア活動に取り組んでおられるみなさんを対象に開講されたICT講座に講師役として参加し、Instagramの使い方や便利な機能、注意点など、大学生の視点でお伝えしました
かたのゲームスポーツフェスタ おうちで過ごす時間が長い人や、出かけるきっかけがない人、だれかとコミュニケーションを取りたい人などの交流機会の創出を目的にはじめて開催されたイベントの運営サポートを行いました
ボランティア体験 地域で活躍されているボランティア団体の活動に参加させていただきました
福祉教育 みんなが支えあい、だれもが役割をもって活躍できる地域共生社会の担い手の育成を目指す「福祉教育」の一環として、小学校で児童のみなさんの福祉意識を高める活動に取り組みました

3. 活動を通じた成果と学び

○ さまざまな子どもたちとのコミュニケーションの方法を学ぶことができた
○ 子どもたちのいろんなニーズに臨機応変に対応する力が身についた
○ ボランティアさんたちの協力によって活動が成り立っていることに気がついた
○ ボランティアとして活動することへのやりがいを感じることができた
○ 分かりやすく伝えることが難しく大変でしたが、いっしょにパン屋さんなどを検索しながら地域について話せたので楽しかった
○ 学校や社会に一歩踏み出すきっかけづくりのお手伝いができてよかった

プロジェクト名　**学校にいけない・いかない子たちの居場所をつくる**

連　携　先　**社会福祉法人有田市社会福祉協議会**

参加学生数　1年生：7人　2年生：5人　3年生：8人　　担当教員　上野山　裕士

1. 活動実施の経緯

有田市社会福祉協議会が定期的に開催する「学校にいけない・いかない子をもつ親同士がつながる場」から派生したプロジェクトです。2022年度、摂南大学PBLプロジェクトの一環として開始、23年度からはFAL演習で活動を引き継ぎ、現代社会学部の学生を中心に、他大学の学生や市社協、地域のさまざまな個人、団体と連携しながら子どものあらたな居場所づくりに取り組んでいます。

2. 活動の内容

バーチャル、リアルを併用した居場所づくりに取り組んでいます。

〇バーチャルの居場所（毎週金曜日（第4金曜日を除く））

オンライン上のバーチャル空間（「oVice」）を活用し、参加者と大学生が交流しています。大学生スタッフが毎回の「トークテーマ」を設定していますが、会話のなかで趣味やゲームの話、日々の生活やそれぞれの地元の紹介など、話題がめまぐるしく変化することもバーチャルの居場所の醍醐味です。

〇リアルの居場所（第2土曜日および第4金曜日）

有田市内の「ヒミツキチ」を活用して、対面での交流を楽しんでいます。金曜は午後の時間帯に、芋掘りや仮装パーティーなど季節ごとのイベントやスタッフと参加者で企画したゲームなどを楽しんでいます。土曜は午前中から参加者とスタッフが一緒になって料理をつくり、食事を楽しみます。その拠点は有田市内を転々としています。食事のあとはゲームをしたり散策をしたり、楽しい時間を過ごしています。

〇教育支援センター分室での交流（第3金曜日）

有田市立有和中学校内に設置されている教育支援センター分室「ふらっと」にて、生徒との交流を楽しんでいます。「ふらっと」での交流をきっかけに「バーチャルの居場所」「リアルの居場所」に参加してくれるようになった生徒もたくさんいます。

3. 活動を通じた成果と学び

学校にいけない・いかない子たちの想いに寄り添うことを意識し、さまざまな活動を企画、運営することができた。その際、学生はもちろん、連携先や地域ボランティアのみなさんと協働しながら、よりよい場づくりに取り組んだ。現地での活動を通じて、「学校にいけない・いかない」背景にはさまざまな事情があることに気がついた。また、この取り組みに関わる地域の方々の想いにふれ、子どもたちの成長を見守る地域のあたたかなまなざしを感じることができた。

ARIDA_NO_IBASHO

プロジェクト名	**子どもの声を聴く仕事** **ー困難な状況にある子どもを支援する現場を知るー**
連　携　先	**司法面接トレーナーの会/司法面接支援室**
参加学生数	1年生：1人　2年生：1人 3年生：4人　（計6人）　　担当教員　田中　晶子

1. 活動実施の経緯

様々な場面で子どもの声を聴くこと（意見表明権）の重要性が強調されている。しかし、子どもの声を聴くことは簡単ではなく、特に児童虐待や犯罪に巻き込まれた子ども、両親の離婚や非行問題などに関与した子どもから話を聴くことは大変難しく、特別な聴き取りが必要とされる。そのため、そのような子どもたちに対応する警察や児童相談所、家庭裁判所では子どもから話を聴くための特別な研修を実施している。本プロジェクトでは、子どもの声を聴くための取り組みや仕事の実際を知り、子どもから適切に話を聴くことにつながるより良い研修ができるよう、研修で使用する動画作成を通して、学生の立場から支援を行う。

2. 活動の内容

・家庭裁判所訪問：庁舎見学と家庭裁判所調査官の方との座談会
・司法面接研修（半日研修）受講
・少年補導職員・スクールソーシャルワーカーの方との座談会と勉強会
・日本犯罪心理学会・法と心理学会への参加
・「第 84 回関西ネットワークシステム（KNS）定例会」でのプレゼンテーション
・司法面接研修で使用する研修動画の作成とトレーナーの会への提供

3. 活動を通じた成果と学び

本活動を通じて、子どもが秘めている心の声に耳を傾けることの難しさや面接者の反応や態度、言葉の選び方が、子どもの語りの内容や方向性に大きな影響を与えることを実感した。普段の対人場面と違って、司法や福祉等子どもを支援する現場では、過度な反応や誘導的な発言が、子どもの記憶や意見の表明に大きく影響を及ぼす可能性があり、「評価を含まない聴き方」が求められていた。この点から、子どもの最善の利益を守るためには、共感だけでなく専門的知識と高度な配慮が不可欠であることを学んだ。また、活動の中で研修動画の作成に携わったことで、司法面接を「知る側」から「伝える側」として考える機会を得た。まだ一般的には十分に知られていない司法面接を、学生の視点で可視化し、わかりやすく伝えることは、将来的に制度への理解や関心を高めることにつながると感じている。司法面接が特別な場面だけのものではなく、子どもの声を守るために身近な社会資源として認識されることの重要性を、本活動を通じて強く意識するようになった。

プロジェクト名　**子どもたちの「自己実現」にともに取り組む**

連　携　先　**NPO 法人ろーたす**

参加学生数　1年生：３人　　担当教員　好井 裕明

1. 活動実施の経緯

NPO法人ロータスでは「一人一人の自己実現」を理念に掲げ、不登校や病気で学校に通えない子供たちを対象に支援を行っている団体です。フリースクールや、訪問支援、居場所支援など、子供たちの状況に応じた様々な事業を展開しています。学校への出席認可が可能である学習支援や、夕食支援だけではなく、地域のイベント企画・運営など、子供たちの生活全体を支える幅広い活動を行っています。このようなことから、子供たちが人とかかわる機会を大切にし、さまざまな体験に取組んでいます。

2. 活動の内容

私たちは毎週金曜日に現地を訪問し、子どもたちと直接関わる時間を大切にしながら、交流を深める機会を設けました。

活動では、子どもたちがリラックスして過ごせるよう、会話や簡単なレクリエーションを通して触れ合うだけでなく、摂南大学のキャンパス内を巡る学校探検も実施しました。大学という場所に対して不安や距離を感じている子どもたちに向けて、大学がどのような場所であるのか、どのような人が学び、どのようなことを学べるのかを、実際に見て体験しながら知ってもらうことを目的としました。

学校探検では、大学にまつわるクイズを取り入れることで、楽しみながら大学について学べる工夫を行いました。また、模擬法廷の見学を通して法律を学ぶ場を紹介したり、図書館を見学して多くの本や学習環境に触れる機会を設けたりするなど、大学ならではの施設を活用した活動も行いました。これらの体験を通して、子どもたちが学ぶことや将来の進路について前向きに考えるきっかけになることを目指しました。

3. 活動を通じた成果と学び

学んだこととしては、まず、子どもたちと多く触れ合っていく中で、子どもたちによって求められる対応が大きく異なることを学びました。そして、学校探検を行うにあたって、企画や準備を自分たちで進めたことで、主体的に行動する力が身に付きました。また、説明をする立場に立ったことで、摂南大学の魅力や特徴を改めて見つめ直すことができました。

これらのことから、今回の活動を通して、支援する立場の責任の重さや、様々な年代の人と関わることの大切さを学び、私たち自身も大きく成長することができました。このような誰かを支える居場所は、大切であり、この先もあり続けるべきものだと感じました。

プロジェクト名	働く人々の地域コミュニティを考えるプログラム：ワーカーズコープ（その１）
連　携　先	日本労働者協同組合（ワーカーズコープ）関西事業本部
参加学生数　1年生：１人　３年生：６人	担当教員　浅野 慎一

1. 活動実施の経緯

雇われて働くのでもなく、自営業でもない。お金のためにだけ働くのでもない。地域に生きる人々が直面する諸課題を、単なるボランティアではなく、「仕事・起業」によって解決する、「人間のための、人間らしい働き方」を考える。地域が直面する諸課題、住民が直面する様々な生きづらさ・諸問題を発見し、それを「仕事・収入源創出」や「コミュニティつくり」へとつなげ、実践的に解決しているワーカーズコープ。その現場を実体験・見学し、協同労働の実態・課題を知る。あわせて、「働く」ということについて認識を深める。

2. 活動の内容

西宮市の「上甲子園小学校育成センター（学童保育）」と、ひきこもりの子供たちの居場所「ろばの家」で、指導員補助として、室内遊び（本、折り紙、塗り絵、ボードゲーム等）、外遊び（一輪車、大縄跳び、ドッチボール、サッカー、かけっこ、鬼ごっこなど）に参加した。また上甲子園口駅の花壇への水やりなど地域貢献活動にも参加した。

ワーカーズコープ・協同労働、および多様な地域社会の現状と解決課題について概論的な座学学習・映画鑑賞なども行った。

3. 活動を通じた成果と学び（受講生の声）

・児童との距離感の取り方、「見守り」の大切さ、責任感の重要性、広い視野と体力の必要性など、現場で初めて気づくことが多かった。
・子供たちに対して当初、過剰な遠慮や緊張を感じてしまい、積極的・主体的に関わることができなかった。実際に交流を深める中で、それを乗り越えられた。
・社会の現場において、「報告・連絡・相談」がいかに重要か、受け入れ先の皆さんに迷惑をかけてしまい、深い反省の中で学ぶことができた。
・ワーカーズコープという働き方について、基本的な知識・理解を得るとともに、「やりがい・社会貢献・人のつながり」といったメリット、「話し合いに時間がかかる、一人一人の主体性・責任が問われる」といった課題も感じた。

プロジェクト名	働く人々の地域コミュニティを体感するプログラム:ワーカーズコープ(その 2)
連　携　先	日本労働者協同組合(ワーカーズコープ)但馬地域福祉事務所
参加学生数　1年生: 2 人　3 年生: 1 人	担当教員　浅野 慎一

1. 活動実施の経緯

地域が直面する諸課題、住民が直面する様々な生きづらさ・諸問題を発見し、それを「仕事・収入源創出」や「コミュニティつくり」へとつなげ、実践的に解決している社会事業の現場を実体験する。あわせて、現代日本社会が内包する様々な解決課題を体感し、深く考察する機会を得る。
具体的には、兵庫県豊岡市において林業・農業などを介した地域創生と若者就労支援、居場所づくりなどの事業に参加体験する。
活動目標として、①「働くこと」の多様性、社会的な意味・価値を体験的に学ぶ。②体験から気づいた課題・改善策を考察する、の 2 点を掲げた。

2. 活動の内容

・ワーカーズコープ・協同労働、および多様な地域社会の現状と解決課題について概論的な座学学習・映画鑑賞などを行った。
・地域の「居場所」としての喫茶店(「だんだん」)の運営の補助に従事。調理や接客を行った。
・「居場所」と「就労支援準備」を一体化して利用者に提供する「ひまわり」において、農作業・掃除などの就労体験、地域交流イベント・手話教室、ふくふくファームの運営に参加。
・次世代に遺す山づくりをモットーに森林整備を行っている「NextGreen 但馬」、「森のようちえん・つむぐり」の活動に参加。
・「コウノトリの郷公園」で、地域の自然・歴史について学ぶ。

3. 活動を通じた成果と学び(学生の声)

・ワーカーズコープにおいて、利用者が当事者でもあるためニーズに柔軟に対応できる、幅広い世代間交流が実現できている、利益に縛られず必要なサービスが届けられるといった特徴を学んだ。その一方、人出不足・情報発信力の弱さなど課題も感じた。
- 柔軟で適切な支援が可能になっているからこそ、利用者が安心してサービスを受けられことを実感したと同時に、現場の声を活かす重要性を学んだ。
- 初めていく地域で、地元の方が暖かく迎えてくれ、素晴らしい体験に繋がった。この体験を様々な場で生かしていきたいと思った。
- 困りごとを抱える人と直接交流することで、より良い解決方法を模索・提案できる点に魅力を感じた。他の地域の取り組みにも興味を持った。

プロジェクト名　障害者ボランティア団体のイベント活動を SNS 発信する

連　　携　　先　公益財団法人 阪喉会

参 加 学 生 数　1年生：３人　２年生：２人　　担 当 教 員　　藤井 和佐

1. 活動実施の経緯

阪喉会（はんこうかい）では、会員ボランティアが同病者である会員に代用音声を指導することによって生活再建・社会参加を支援しています。代用音声には、食道発声（食道へ空気を取り込み、それを腹圧等で戻して発声する）や電動式人工喉頭（EL。電気で振動する機械を首に当て、その振動を声として使う）、笛式人工喉頭などがあります。それぞれの方法を習得するための上達レベルに応じた発声教室を阪喉会が運営しています。しかし、このような代用音声があることも、それの指導・訓練をする団体があることもあまり知られていません。そこで、阪喉会の活動と会員の現状を「知ってもらう」ことを目標としたのが本プロジェクトです。

2. 活動の内容

喉頭摘出者（発声できない）、かつがんサバイバー、かつ（ほとんどが）高齢者である会員で成り立っている団体が「阪喉会」です。阪喉会と連携し、代用音声教室での会員の訓練・指導の様子や万博会場などでのイベントの様子、阪喉会の行事などを動画撮影し、学生目線のキャプションを入れて SNS、阪喉会の WEB サイト等を使って発信しました。

発声教室を開いている肥後橋教室では、上期と下期の最後に終講式をおこなっています。その際に発声練習の成果発表があります。下期終講式では、発声教室での訓練の様子を撮影しており、そこでがんばっていた会員の成果発表を撮影することができました。大阪関西万博では、各代用音声の紹介がなされるとともに、来場者への EL の体験会が開催され、それを撮影しました。日本喉摘者団体連合会近畿ブロック指導員養成研修会では、指導する側の会員に目が向くきっかけとなりました。

また、当初計画にはなかったのですが、万博でのイベントに参加されていた EL の輸入代行・修理対応をおこなっている濱田産業株式会社と交流がかない、意見交換・質疑応答の機会をもちました。

3. 活動を通じた成果と学び

継続して撮影していると代用音声の訓練の成果をとらえることができます。授業の合間をぬっての取材活動に地道に取り組んだ成果が、動画のキャプションに表現されています。また、動画の発信のためには動画編集作業もあります。代用音声が上達していく会員と同じように、動画編集が上達しました。

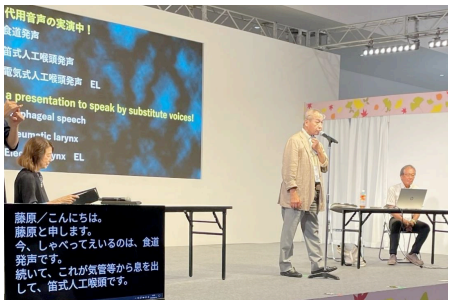
以下は活動した学生の言葉です。

「阪喉会の方々との連携活動を通して、声を出して会話をすることは当たり前ではないということを実感した。また声を失った方々が社会復帰を目指して日々EL などの代用音声を使いこなすために練習する様子を見て、生活をする中で様々な悩みをかかえている人がいることをリスペクトできる、その立場の側に立って物事を考えることができ寄り添える人間になるべきであると考えた。

特に印象に残ったのは、発声教室での取材中に受講者の方が指導員から改善点を指摘されていたが、その点をしっかり修正して本番のスピーチで発表されていたことである。短い期間の取材ではあ

ったが、訓練によって発声が上達するということを感じることができ、訓練をすれば上達するということも SNS で発信していけた。

活動しながら出てきた私たちの課題としては、周りに遠慮して消極的だったことである。インタビューをすれば、もっとキャプションに生かせたと思う。



プロジェクト名	**交流人口・関係人口拡大、移住・定住者受入に向けた自治体の取り組みに関する調査**
連　携　先	**富山県上市町**
参加学生数　1年生：4人、3年生8人	担当教員　松本 恭幸

1. 活動実施の経緯

前年度、ゼミにゲストスピーカーとして来た電通のコンサルタントの方が、かつて富山県上市町の地方創生アドバイザーをしており、その地域づくりの先進的な取り組みについて話をうかがった。このことをきっかけに、ゼミ生からの希望もあって、電通の方の紹介で富山県上市町の交流人口・関係人口拡大、移住・定住者受入の取り組みについて、自治体職員、地域おこし協力隊員、地元企業関係者等の現場の当事者に取材し、その成果を学外での公開報告と、コミュニティ FM の放送、YouTubeLive の番組で紹介することになった。

2. 活動の内容

地域の抱える課題とその解決に向けた取り組みについて事前に文献購読（安宅和人『シン・ニホン』ニューズピックス、広井良典『人口減少社会のデザイン』東洋経済）を通して勉強するとともに、Zoom で上市町の自治体職員と打ち合わせを行った。

9月に2泊3日で上市町を訪れ、上市町産業課企業支援班、企画課情報班の職員、まちづくり会社のKAMIICHI チャレンジのスタッフ、上市町地域活性化企業人の方や上市町でリモートワークで仕事するIT企業の代表の方を始めとした移住者、アメリカ人や中国人の地域おこし協力隊員、地元でインターネットラジオを運営する方、上市町観光協会の方等にヒアリング調査を行った。

ヒアリング調査したことは、KNS関西ネットワークシステムの定例会で報告するとともに、奈良県田原本町のコミュニティ放送局 FM まほろばの放送や、YouTubeLive のトーク番組で紹介した。

3. 活動を通じた成果と学び

少子高齢化が進む日本の地域社会の課題やその解決について、これからの地域づくりに必要な交流人口・関係人口拡大、移住・定住者受入に向けて早くから取り組んできた富山県上市町の先進的な事例について、自治体職員や町と連携して様々な取り組みを行っている一般の市民の方に話をうかがって調査研究し、これからの新しい自治体行政の果たす役割について学ぶことが出来た。また放送や YouTube の番組制作を通して、広く社会に自らの経験にもとづくメッセージを伝える貴重な経験をした。

プロジェクト名 **自治体DX推進による防災・関係人口拡大に向けた課題解決に関する調査**

連　携　先 **神奈川県真鶴町**

参加学生数　2年生:12人　　担当教員　松本 恭幸

1. 活動実施の経緯

担当教員と旧知の元横須賀市議員で、Code for コミュニティと連携してオープンデータを活用した地域づくりに取り組んだ実績のある小林伸行氏が、神奈川県真鶴町の町長に当選し、町役場の機能を住民対応の窓口業務以外はオンライン化し、役場の仕事の大半をリモートワークに切り替える構想を打ち出して ABEMA Prime や ReHacQ で話題となった。この全国の自治体の中でも最先端の自治体DXを始め、真鶴町の防災・関係人口拡大の取り組み等について、町長、自治体の職員、地域おこし協力隊員等の現場の当事者に、ヒアリング調査することを目的として企画した。

2. 活動の内容

自治体 DX を始めとした地域情報化について事前に文献購読(安宅和人『シン・ニホン』ニューズピックス、広井良典『人口減少社会のデザイン』東洋経済)を通して勉強するとともに、Zoom で真鶴町の自治体職員と打ち合わせを行った。

そして8月に2泊3日で真鶴町を訪れ、町長を始め、まちづくり課と政策推進課の職員、地域おこし協力隊員、一般社団法人真鶴未来塾の代表、地元の地方出版社の真鶴出版の方にヒアリング調査を行った。

ヒアリング調査したことは、KNS関西ネットワークシステムの定例会で報告するとともに、奈良県田原本町のコミュニティ放送局 FM まほろばの放送で紹介した。

3. 活動を通じた成果と学び

少子高齢化が進む日本の地域社会の課題やその解決に向けた行政の取り組みの方向について、特にこれからの地域づくり(防災・関係人口拡大等)に必要な自治体DX(オープンデータの活用も含む)等の地域情報化を中心に、真鶴町を舞台に自治体のトップ(町長)から関係する部署の職員、地域づくりに関わる一般社団法人のキーパーソンの方にヒアリングして、多くのことを学ぶことが出来た。またその報告のためのコミュニティ放送局での番組制作を通して、広く社会に自らの経験にもとづくメッセージを伝える貴重な経験をした。

プロジェクト名

全国各地のまちライブラリーに関する調査と ブックフェスタジャパン 2025 での報告

連　携　先　**一般社団法人まちライブラリー**

参加学生数　1年生：2人、2年生：13人　　担当教員　松本 恭幸

1. 活動実施の経緯

本を媒介にした人の集まる地域の居場所としてのまちライブラリーについて、2024 年度に北海道と関西（大阪、京都、奈良、兵庫）でフィールド調査を行い、その成果を学内外での公開報告会、コミュニティ放送や YouTubeLive の配信で伝えたが、それに続けて 2025 年度は、長野（茅野市）、東京（町田市、西東京市、千代田区）で同様の調査を行い、その成果を学内外の公開報告会、コミュニティ放送、YouTube のトーク番組で報告した。

2. 活動の内容

地域コミュニティの核となるサードプレイスやまちライブラリーについて事前に文献購読（礒井純充『まちライブラリーの研究』みすず書房）を通して勉強するとともに、大阪のまちライブラリーのサポーター市民の会議に参加して、まちライブラリーについて理解を深めた。

そして 10 月のブックフェスタジャパンの期間中に、4泊5日で長野県茅野市のまちライブラリー@My Book Station 茅野駅、東京都町田市のまちライブラリー@南町田グランベリーパーク、西東京市のまちライブラリー@MUFG PARK、千代田区のまちライブラリー@ブックハウスカフェを訪問し、スタッフの方にヒアリング調査した。

ヒアリング調査したことは、KNS関西ネットワークシステムの定例会で報告するとともに、奈良県田原本町のコミュニティ放送局 FM まほろばの放送や、YouTubeLive のトーク番組で紹介した。

3. 活動を通じた成果と学び

少子高齢化が進む日本の地域社会の課題やその解決に向けて、地域で市民がシビックプライドを育むのに必要な人の集まる地域の居場所（サードプレイス）としての私設図書館が担う役割に注目し、4カ所のまちライブラリーの事例を対象に調査研究を行ったことで、学生達はこれからの地域コミュニティのあり方について考え、学ぶことが出来た。また放送や YouTube の番組制作を通して、広く社会に自らの経験にもとづくメッセージを伝える貴重な経験をした。

プロジェクト名	ネットメディアの役割と地域に根差した情報発信に向けたアプローチ
連　携　先	株式会社 morondo
参加学生数　1年生：１人	担当教員　横山 孝文

1. 活動実施の経緯

地域に根ざして情報発信するネットメディアとその役割について考えるため「枚方つーしん」などのネットメディアを運営する株式会社 morondo にて取材の実体験および学生視点からの提案などのアプローチを実施。

自身のネット利用について検討し、地域に根差した情報に関して検討していきます。その上で、取材活動を通じて、ネットメディアの役割と地域に根差した情報発信に向けたアプローチを学生視点で検討する。

2. 活動の内容

メディアや情報伝達、検討方法などを前期に実施。取材などに関しては、夏季休暇中に集中して行った。

〇情報伝達に関する検討（毎週金曜日）

「伝える」重要性を学ぶため、ブレーンストーミングなどの手法をつかって、自分自身で「理解」「検討」「発想」するための基礎力を身につけました。

また、オンラインにて連携先の業務内容について学んだ。

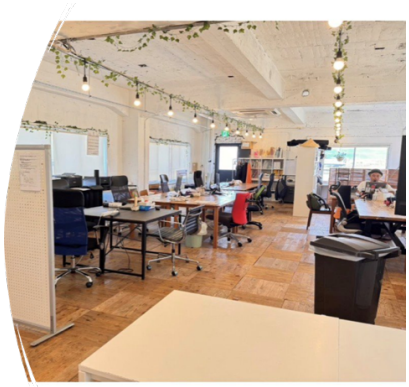
〇取材および学生提案（8月25～27日）

枚方つーしんの取材を通して、ネットメディアを知るとともに課題の検討と提案を行った。

3. 活動を通じた成果と学び

取材を通じて、被写体の角度、明るさなどのカメラワークなどの取材手法だけでなく、地域に根ざすネットメディアのミクロな視点に対して、普段から地域の貼り紙を確認するなど街の細い動きを知ることや地域メディアだからこそできることを知った。

学生自身は相手がどのような情報を得たいかを考えるべきだと感じるとともに、課題に対する準備とプレゼンテーションがうまくできなかったことが今後の課題と考えています。



プロジェクト名	ロハスフェスタにおけるプロモーションの検討および実施
連　携　先	ロハスフェスタ・放送映画
参加学生数	1年生：３人　２年生：１人 ３年生：３人
担当教員	横山 孝文

1. 活動実施の経緯

万博記念公園で開催される SDGs に関するイベント「ロハスフェスタ」のプロモーションについて検討、実施します。

特に若年層への来場者貢献に繋げる学生視点で情報発信をおこないます。

内容に関しては、主催者側とも企画・運用、配信などディスカッションしながら進めていきます。

2. 活動の内容

メディアや情報伝達、検討方法などを前期に実施。春のイベントは下見として、情報発信に関しては、後期に集中して行った。

〇情報伝達に関する検討（毎週金曜日）

「伝える」重要性を学ぶため、ブレーンストーミングなどの手法をつかって、自分自身で「理解」「検討」「発想」するための基礎力を身につけました。

また、オンラインにて連携先の業務内容について学んだ。

〇情報発信（随時）

ロハスフェスタを見て、体験し、どのような取材を行うか。どのような手法で情報発信するか。コンテンツはどうするかなど、学生の視点で実施している。

3. 活動を通じた成果と学び

連携先からは「とにかく楽しむ」との言葉をいただき、大学生目線からイベントとしてのロハスフェスタについて考え、若者が来場するにはどうするかを PR だけではなく、多角的な視点から行なった。情報発信については、SNS 利用者をいかに誘導するかでハッシュタグなどさまざまな工夫を行うとともに著作権処理など丁寧な作業が求められることを学んだ。

SETSUNAN_LOHAS

プロジェクト名　**地方媒体企業における SDGs 活動への参加**

連　　携　　先　**毎日放送**

参 加 学 生 数　２年生：６人　　担　当　教　員　　横山 孝文

1. 活動実施の経緯

地方メディア企業として毎日放送がおこなう SDGs に関する活動に参加し、活動を通じて地方で活動するメディア企業として SDGs にて何ができるかをともに検討する。

SDGs の なかでも生物多様性をテーマにイベントの企画、運用などを実施した。

2. 活動の内容

メディアや情報伝達、検討方法などを前期に実施。夏に地域と特定外来生物、秋に地域と海の生き物としてイベントを実施した。

〇情報伝達に関する検討（毎週金曜日）

「伝える」重要性を学ぶため、ブレーンストーミングなどの手法をつかって、自分自身で「理解」「検討」「発想」するための基礎力を身につけました。

また、特定外来生物「クビアカツヤカミキリ」に関する調査など行なった。

〇イベントによる情報発信（8 月 17 日・11 月 8,9 日）

・さかなの学校（神戸市垂水区：8/17）

特定外来生物「クビアカツヤカミキリ」の標本づくりを企画・運用

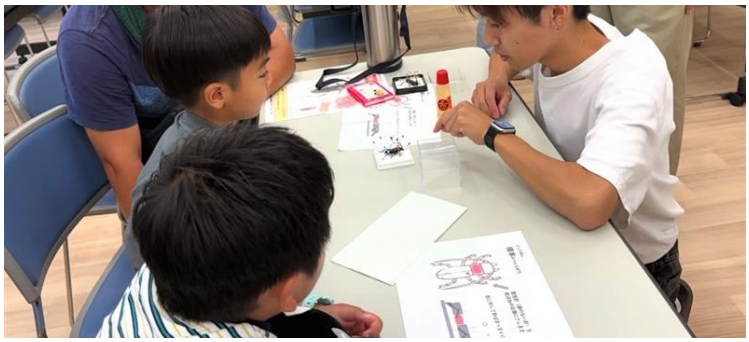
・神戸グルメディスカバリー（神戸東遊園地：11/8-9）

神戸の食をテーマとしたイベントにおいて、「神戸いきものディスカバリー」ブースの企画・運営

3. 活動を通じた成果と学び

夏の特定外来生物については、学生たちから連携先に提案。神戸の自然を守ることをテーマとして開催することができ、また予期せぬトラブル対応も柔軟にこなした。

秋は、規模感の違うイベントに参加し、子どもたちへのアプローチだけでなく、老若男女に合わせた対応を自分たちで考え実施出来た。



プロジェクト名	兵庫県但馬地域の観光をテーマとした地域活性の課題と実践
連　携　先	朝来市
参加学生数	1年生:4 人　2 年生:1 人 3 年生:2 人
担当教員	横山 孝文

1. 活動実施の経緯

生野銀山や竹田城などを有する朝来市において、26 年度に完成予定の生物多様性をテーマとした施設をテーマとした新たな街の価値創造をおこなう。この施設を核として、連携先と協力しながら但馬地域における観光資源を課題として具体的な課題抽出をおこない、イベントなどの企画提案や実施、地域プロモーション、関係人口など、さまざまな視点から持続可能な地域活性への取り組みを検討し実施していく。

2. 活動の内容

メディアや情報伝達、検討方法などを前期に実施。後期に朝来市黒川地区へ調査。

〇情報伝達に関する検討(毎週金曜日)

「伝える」重要性を学ぶため、ブレーンストーミングなどの手法をつかって、自分自身で「理解」「検討」「発想」するための基礎力を身につけました。

また、特定外来生物「クビアカツヤカミキリ」に関する調査など行なった。

〇朝来市黒川地区調査(9 月 19~21 日・11 月 22 日)

朝来市黒川地区に関する調査として、新施設見学、オオサンショウウオ研究をしている日本ハンザキ研究所の見学、地域住民、行政への聞き取り、地区の調査活動。

その後、新施設での取り組み、黒川地区の情報発信の検討を行い。11 月に行政および住民発表会を実施。

3. 活動を通じた成果と学び

新施設の取り組みでは、オープニングイベントとともに持続可能な企画を検討し、次年度の実施に向けて課題等の整理を行なった。

黒川地区の情報発信では、温泉や新施設などを目的として来た観光客に地区のファンになってもらうべく関係人口の視点から参加型マップ作成の提案を行った。

プロジェクト名　**FAL の FAL―学生による FAL 運営・広報チーム―**

連　携　先　**現代社会学部 FAL 委員会・広報委員会**

参 加 学 生 数　２年生:8 人　３年生:4 人　　担 当 教 員　加戸　友佳子

1. 活動実施の経緯

摂南大学現代社会学部が独自に活動を行っているフィールド型アクティブ・ラーニング、略して FAL。これは、連携している企業・NPO・市などに学生が赴き、学生が持つ興味・関心に沿って取り組む活動です。FAL は現代社会学部が持つ最大の魅力ですが、どういった活動を行っているかは意外と知られていません。FAL の魅力を100%理解してもらうこと、そして現代社会学部の「FAL 文化」について学内に発信する活動も並行して行っています。

2. 活動の内容

主に FAL の広報を行っています。学期の初めに広報の仕方を分けるためメンバーを2つに分けました。オープンキャンパスまでにチラシを作成し配布すること①。もう一つはオープンキャンパス後から行う、各 FAL の Instagram による発信です②。活動の最後には FAL の学内成果報告会で、各教室の司会を担当しました。

① の詳細な活動内容

摂南大学を志望する高校生に現代社会学部について知ってもらうため、自分たちが入学する前に知りたかった情報などをもとに学内にアンケートを取り、それをまとめたチラシを作成しました。チラシは、オープンキャンパスに参加する高校生に配布しました。

② の詳細な活動内容

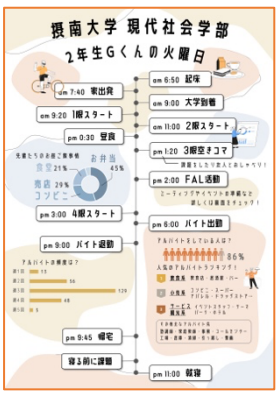
マッチングミスをなくしより効率的に FAL を知ってもらうため、FAL に特化した Instagram アカウントを創設しました。FAL のプロジェクトは50以上あり、事前情報が少ないため、学生がやりたいことと活動内容との不一致が起こっているのではないか、という問題意識からです。全プロジェクトの簡単な紹介を行うとともに、複数のプロジェクトから依頼を受け、Instagram に投稿しました。

3. 活動を通じた成果と学び

大きな成果のひとつは、FALを学外・学内両方に発信するために Instagram を開設したことです。これにより、FAL を受講していない学生に魅力を伝え、マッチングミスを減らすことに貢献できたと思います。そして今年度開講し1年たち、今後活動していくための土台を作ることが出来ました。

課題としては、チーム一体となって活動することが十分には出来ませんでした。公式の名前を使用するので、誤った情報など発信せず私情が挟まらないようにする配慮が難しいと感じました。

この文章で、この画像で伝わっているのかなど不安になることも多かったですが、幅広く広報でき、学内発表に大いに貢献できたと思います。



@SETSUNAN_FAL

プロジェクト名　**三重県のショッピングリハビリ関連地域活動に協力し、日本の未来を考える（事業構想系）**

連　携　先　**ショッピングリハビリカンパニー株式会社**

参 加 学 生 数　1年生：23 人　　担 当 教 員　樫田 美雄・竹中 祐二

1. 活動実施の経緯

ショッピングリハビリは，ショッピングリハビリカンパニーの登録商標であり，**「楽々カート」**という買い物カートであると同時に歩行支援器でもある機器を用いて，介護予防事業をするビジネスモデルで全国展開している活動である．この活動は，**地域社会改革運動**でもある．高齢者を「光齢者」と呼び変えて，高齢になっても誰もが主役として街の住人になって買物（等）をするという**理念**の実現を目指す活動が自治体等とタイアップして三重県いなべ市でも行われていたので，そこに参与した．

2. 活動の内容

いなべ市の有識者にボランティアで手伝ってもらいながら，上述のまちづくり理念を支援する活動を行った．まず，6月から8月に掛けては，いなべ市全域の文献調査をおこない，その報告をズームで現地の有識者の方に行った（3 日連続の通い合宿）．ついで，いなべ市は旧 4 町の合併によって誕生した市であるため，学生を4つの班にわけて，班ごとに，「地理・歴史・産業・交通」を調べて報告した（現地とは遠隔交流）．また，いなべ市の教育委員会を経由して，市役所や社協等に文書で質問しました．更に住宅地図を加工して，ガリバーマップをつくり，地域への理解を深めました．12月12日から14日に掛けては，現地を訪問し，「阿下喜ビジターセンター」において冒頭，各班から，地域の活性化のための提案をし，その後，現地の方からリプライを貰うとともに，市内各地を探訪して地図に落としました．また，グランピング施設の支配人や公園に遊びに来ている親子連れにインタビューもしました．12月24日には，日帰りで補充調査をして，それらの成果を，1月23日に，スライドで発表しました．

3. 活動を通じた成果と学び

いなべ市は，名古屋市内からなら1時間でくることができる都市近郊の「田舎」として，大きなポテンシャルを持っている地域です．藤原地区には，石灰石を利用した太平洋セメントの大工場が稼働しており，その貨物輸送ニーズがあることから，過疎地ではあるものの，旅客の鉄道便も維持されています．そのような，基礎条件が比較的よい地域でも，商店街はさびれ，地元の郷土芸能としての太鼓の継承者もなかなか見つからないというような問題には直面していました．このように，可能性がありながらも，問題に直面している地域だからこそ，学生は多様な提案ができてよかったと思います．学生の提案の一部は承認され，学生の提案の一部は，実現可能性等の観点から退けられてましたが，このように採否いずれもありうるという情勢は，学生の活動の真剣味に繋がりよかったと思います．

楽々カート®

ショッピングリハビリを行う上で欠かせないツールが前腕支持台型歩行器とショッピングカートを組み合わせて独自開発した『楽々カート』です。

プロジェクト名　**まちの魅力を探してみよう！**

連　携　先　**松原市役所・松原市観光協会**

参 加 学 生 数　1年生：8人　2 年生：4人　　担 当 教 員　中澤　芽衣

1. 活動実施の経緯

松原市観光協会は松原市の賑わいと交流の創出を目的に、現在、観光に対する広告や宣伝、イベントの企画や実施などさまざまな情報を発信しています。FAL演習では、「見たもの、感じたものを編集し、文章でターゲットに届ける」を目標に、学生たちは松原市に隠された魅力を発掘し、それを自分たちの文章でまとめ、発信するといった活動に取り組みました。

2. 活動の内容

【前半】Web やSNS情報から松原市の魅力を調査し、発信する

学生自らが松原市の魅力を発掘し、自分たちの言葉で文章を作成することが、前半の活動内容でした。「松原市内の子どもを連れて遊びにいける場所」に関する記事作成の依頼を受けました。学生たちは調べ、3つの候補先を見つけました。取材の日時が決まったあとは、学生たちはどういった記事を作成したいのか、取材時にどういった内容を聞き取りたいのかなどを話し合い、試行錯誤しながら質問票を完成させました。

取材当日は、インタビュー先の魅力やこだわりについて聞き取り調査を実施しました。「魅力を伝えるにはどうしたらよいのか」「読み手はどういった情報がほしいのか」など、意見を交わしながらブログ記事を執筆しました。松原市観光協会の「みなみてかわち」に、学生たちが作成した記事が掲載されています。

【後半】まつばらマルシェのブースのお手伝い

11 月 8～9 日と 2 日間にかけて開催されたまつばらマルシェにおいて、学生たちは松原市観光協会ブースの運営のお手伝いをさせていただきました。松原市観光協会は、松原市の賑わいと交流の創出を目的に設立され、SNS を通して松原市の魅力を発信しています。まつばらマルシェでは、松原市観光協会の SNS をフォローすると、松原市のマスコットキャラクター「マッキー」のグッズがあたるイベントを開催していました。学生たちは、より多くの方々にイベントへ参加していただけるよう、声かけをがんばりました。また、休憩時間には、学生たちは来客者としてマルシェ内を散策しました。まつばらマルシェの魅力について取材し、まとめたものが「みなみてかわち」に掲載されています。

3. 活動を通じた成果と学び

学生が作成した「みなみてかわち」の記事になります。ぜひ、ご覧ください。

【柴籬神社】https://matsubara-kanko.net/shibagaki 2025/

【ゴリラパーク】https://matsubara-kanko.net/asobiba gorillapark/

【読書の森】https://matsubara-kanko.net/dokushonomori 2025/

【まつばらマルシェ】https://matsubara-kanko.net/marche2025 setsunan/

プロジェクト名　**都市型公園の利活用を考える**

連　携　先　**一般社団法人テラプロジェクト**

参 加 学 生 数　1年生:15 人　　担 当 教 員　中澤　芽衣

1. 活動実施の経緯

大阪は、東京 23 区より緑被率が低く、みどりを感じられる場所は少ないです。一般社団法人テラプロジェクトは、都市部にみどりを取り戻すため、さまざまな活動に取り組んでいます。FAL演習では、大阪市北区にある扇町公園を舞台に、学生たちはみどり豊かな社会の実現に向けて、どのような課題が存在するのか、課題解決にはどういったイベントを企画すべきなのかについて考えました。

2. 活動の内容

【前半】扇町公園周辺のフィールドワーク

扇町公園と天神橋筋商店街の現状と課題を知るため、7 月 4 日にフィールドワークを実施しました。学生たちは、扇町公園やその周辺を歩き、情報を収集しました。その後、4 つのグループに分かれ、①扇町公園の現状と課題、②扇町公園でのイベント、③天神橋筋商店街の現状と課題、④天神橋筋商店街でのイベント について考え、発表資料を作成しました。

7 月 18 日に、テラプロジェクトのオフィスにて、これまでの調査をまとめた報告会を実施しました。

【後半】扇町公園でのイベントを考える

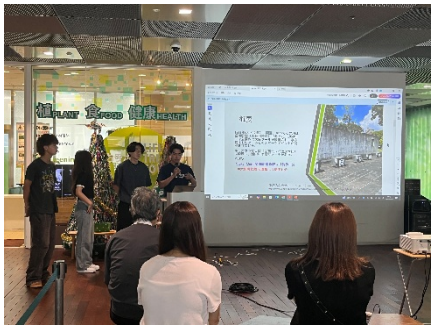
12 月 5 日に、扇町公園パークセンターで「都市型公園の利活用を考える」提案発表会を実施しました。学生たちは、発表会にむけて扇町公園やその周辺を盛り上げるイベントについて考えました。発表会では、「落ち葉アート」や「スタンプラリー」、「運動会」など、さまざまなイベント企画が出され、大変盛り上がりました。

【イベントの実施】

12 月 20 日に、扇町公園にて「みどりをたてまツリー」イベントを実施いたしました。学生たちは、イベントに参加した子どもたちと力をあわせて、400 本のペットボトルを使って、クリスマスツリーを作成しました。

3. 活動を通じた成果と学び

活動を通して、現在、扇町公園やその周辺市域が抱えている課題について、自分の身をもって知ることができました。これらの課題を解決するために、グループ内で議論のために多くの時間を費やし、課題の解決方法や企画の提案力、人へ伝わる資料の作成スキルなどさまざまな力を身に着けることができました。今年度は、学生が考えた「ペットボトルツリー」の企画を実施することができました。次年度も、学生たちのアイディアを実現できるよう、がんばって取り組んでいきます。



プロジェクト名　**街路をテーマとした梅田のまちづくりに参加する**

連　　携　　先　**㈱星田逸郎空間都市研究所**

参 加 学 生 数　1年生:3人　2 年生:2人　　担　当　教　員　　平山　洋介

1. 活動実施の経緯

連携先の星田逸郎空間都市研究所は、さまざまなアーバンデザインと建築設計において、公共的な空間形成に関し、先駆的な成果をあげてきたことで知られています。同研究所が中心主体の一つとなっている梅田エリアのまちづくりに関し、エリアマネジメント団体、街づくり協議会などと連携し、現地に赴いての調査・会議・まちづくり構想などの活動を通じて、都心まちづくりの現場で誰が、何に、どう参加し、街路や公共空間のデザインの構想と実践がどのように進むのかを学びました。

2. 活動の内容

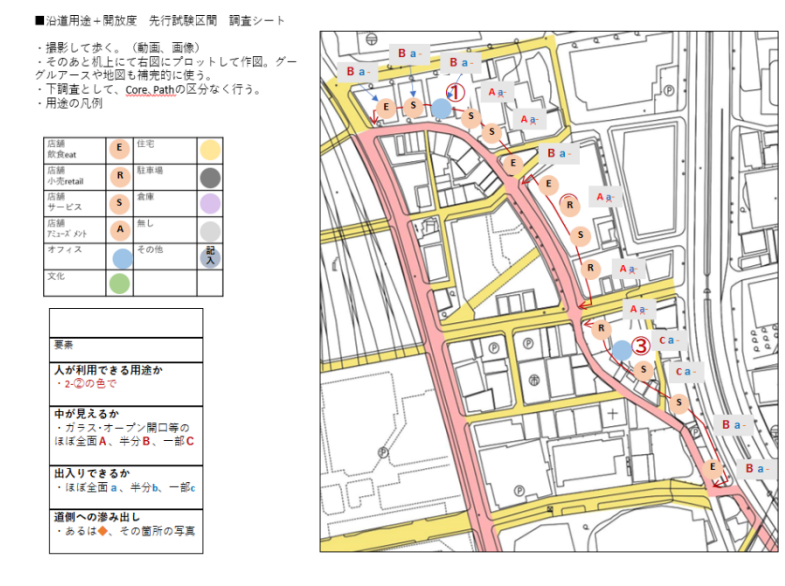
① 茶屋町とうめきた広場のフィールドワークを実施し、街路と公共空間の実態をどう調べ、地図にどう落としこむのか、調査結果をどうまとめるのかを学びました。

② ウメシバ協議会に参加し、都心まちづくりに誰が、どういう立ち位置で、どう参加し、どういう意見を出すのか、その交錯から街路・公共空間の将来がどう構想されるのかを学びました。

③ 学生の意見として、とくにウォーカブルをキーワードとするまちづくり提案をまとめました。

3. 活動を通じた成果と学び

上記①では、徒歩観察、写真撮影をもとにしたフィールドワークの方法と結果記録の手法を学びました。上記②では、都心部のあり方について、さまざまな立場から出される異なる意見の交錯から街路・公共空間がどのようにデザインされるのかを学びました。さらに③の活動では、ディスカッションの仕方とそこからまちづくり提案をどうまとめるのか、それをプレゼンテーションにどのように落としこむのかを学びました。



プロジェクト名　**地域とつながる観光の現場を知る**

連　　携　　先　**悠ツアー**

参 加 学 生 数　1年生：5人　　担　当　教　員　　平山 洋介

1. 活動実施の経緯

悠ツアーは、滋賀県を舞台に、訪日外国人の個人旅行者向け英語ガイドツアー事業を 2012 年より運営してきました。ツアーの特徴は、訪問先の人びととの交流を通して、その暮らしやなりわいを体験することです。地域の方の協力を得ながら、地域密着型のツアー事業を展開しています。

観光は、インバウンド部門を中心に急拡大し、それを受け入れる地域の社会・経済・環境により大きな影響を及ぼしはじめています。観光と地域に関する論点を考えたうえで、そのビジネスとしての具体的な実践例に触れることは、大学生にとって重要かつ有意義と考え、悠ツアーでの地域・観光活動から学ぶ FAL 演習をスタートさせました。

2. 活動の内容

既存ツアー目的地の一つである畑集落（滋賀県高島市）をフィールドに、下記の活動を行いました。

①地域の観光資源探し

ガイドツアーの実施にあたっては、訪問先の地域に関する情報の収集とその絶え間ないアップデートが不可欠です。ガイドツアーでの散策時における外国人客への説明の素材として使えそうなものを、大学生が自分の足で歩いて探し、地図に書き込むフィールドワークを実施しました。

②地域活動への参加

地域密着型のツアー事業を継続するには、地元の方と関係を構築し維持することが大切です。そのための取り組みの一つとして、現地イベントに参加し、地元の人たちと交流しながら、さまざまな作業を手伝いました。

3. 活動を通じた成果と学び

上記①については、初めて現地を訪れる学生の新鮮な視点から地域を眺めることで、新しい地域資源を見つけることにつながりました。また、大学生にとっては、自分たちには「当たり前」のものが、訪問者（外国人）の目線から珍しいことがありえる、という気づきを通して、ものごとを色々な方面から眺めることの重要さと面白さに気づく機会となりました。

②に関しては、集落の人たちと大学生との会話の中から、ガイディングに役立つアイデアが生まれました。大学生にとって、観光ビジネスが、事業者と観光客だけで完結するものではなく、訪問先となる地域の社会・経済・環境への配慮が不可欠であることを学ぶ機会になりました。

プロジェクト名　**四條畷市田原地域における「地域主体のまちづくり」**

連　　携　　先　**四條畷市役所**

参 加 学 生 数　1年生：8 人　2 年生：2 人　　担　当　教　員　山本　圭三・藤井　和佐

1. 活動実施の経緯

四條畷市は、西部と東部で大きく実情が異なっているという特徴があります。西部地域から山を挟んだ東部地域（田原地域）は閑静な住宅地になっており、近年では高齢化が徐々に進行しつつあります。将来的には、（西部地域との環境の差も相まって）その「良さ」も次第に失われていくのではないかという危機感があります。こうした現状をふまえ、田原地域ではこれまでまちづくりを目的としてさまざまな取り組みを行なってきましたが、市外住民や若者の視点が取り入れられていないという課題がありました。こうした現状をふまえ、本プロジェクトでは田原地域のまちづくりへの実際の取り組みや、地域の魅力発信方法の検討などに参加することになりました。

2. 活動の内容

田原地域のイベントに参加し、地域住民とともに地域活性化を促進することを活動の目標として、主に下記の 3 つの方向から地域課題にアプローチしました。

①地域交流イベントへの参加・運営支援

たわらマルシェ、夏まつり（市民参加型イベント）等で、連携先の方と共に運営をおこないました。

②自動運転車（TCC）の運営補助

年度初めに自動運転車に試乗させていただきました。その後、ボランティアスタッフとして運営活動（受付・広報など）を担当しました。

③地域住民が集うミーティング、未利用地活用イベントへの参加

カフェミーティング、ワークショップに参加し住民との交流、意見交換をしました。また、未利用地活用イベントに参加し、作業を通して地域の皆さんと共に未利用地の現状と今後について考えました。

3. 活動を通じた成果と学び

1）実証的・実践的な取り組みの実現

自動運転や新たな交通手段の実証実験等、技術を地域課題解決に結びつける試みが実現しました。

2）多様な主体との連携強化

行政・住民・企業・大学などが関わることで、地域に新しい視点や資源が流入しました。話し合いや試行錯誤を重ねることが重要であると改めてわかりました。

3）技術は目的ではなく手段

自動運転などの先端技術は「導入すること」自体が目的ではなく「地域の暮らしをどう良くするか」のための手段であるという認識が共有されました。

プロジェクト名	フィールドスタディへの参加を通じて持続可能な地域づくりについて考える
連　携　先	飯田市大学誘致連携推進室
参加学生数　1年生:4人　2年生:5人	担当教員　後和　美朝

1. 活動実施の経緯

本プロジェクトでは自治体から提供されたフィールドスタディを通して、その地域で展開されている市民と行政の協働によるまちづくりを見学・体験し、その学びの中から持続可能な地域づくりについて考えてもらいます。令和7年度のテーマは『「自治」と「協働」を基盤とした飯田の取り組みから「まちづくり」を学ぶ』で、現地学習会は令和7年8月7日～10日の3泊4日で開催されました。7月23日には事前学習会としてオンラインオリエンテーションが実施されました。現地学習会では他大学の学生とチームを作り、その日に行った活動内容についてグループ討議を行い、自治体のまちづくりに対する理解を深め、市民の主体性や協働性、行政の在り方などについて学びました。

2. 活動の内容

現地学習会までに行われましたオンラインオリエンテーションでは、現地学習でグループを組むメンバーのアイスブレイクから始まり、それぞれの出身地を解説し合いながら交流を深め、現地学習に大変役立つものでした。今年度の現地学習会は、同期間に市民がつくる人形劇の祭典「いいだ人形劇フェスタ」が開催されることから、「いいだ人形劇フェスタ」の鑑賞だけでなく、その活動を支えている方々のお話を聞きながら、実際に「いいだ人形劇フェスタ」を支えている地域住民の方々の活動を実際に行いながら、自治体や住民との関わり方を直接学ぶことができました。また、古くから引き継がれている「いいだ人形劇フェスタ」のような活動だけでなく、飯田市リニア推進部の職員による「リニアの通るまち飯田、移動革命とこれからの地域づくり」について、新たな自治体の取り組みも紹介されました。リニア開通については佐藤健飯田市長による講演「飯田は日本一住みたいまちになる！」でも紹介され、地方自治体職員を目指す学生からも多くの質問が出ていました。最終日には各グループによる成果発表会が行われました。

3. 活動を通じた成果と学び

飯田市で行われる様々なまちづくりの取組みを学び、その基盤となっている「自治」や「協働」について考える機会となっただけでなく、講師となった市民や行政職員と全国から集まった大学生との対話や交流を通じて、学生が自らの考え方や知見を広められる機会となりました。

プロジェクト名　**産官学協働による地域課題解決**

連　　携　　先　**株式会社　シンク・アンド・アクト**

参 加 学 生 数　1年生：5 人　　担 当 教 員　　竹中　祐二

1. 活動実施の経緯

本プロジェクトは、事前のリサーチとフィールドワークを両立した、地域課題の発見と具体的な解決策の提案を、連携先企業およびフィールドワーク先自治体職員と連携することで、産官学協働による立場の違いを意識した多角的な実践力・課題解決力を身に付けることを目的として始めました。連携先であるシンク・アンド・アクト社は、京都を拠点に、地域や人々の困ったことや素敵なことを集め、これまで繋がっていなかったものをひねって、繋げて、事業を生み出し、社会と人をつなげる仕事をしておられます。ひきこもり支援や学生の就業支援等、多岐に渡る取り組みがある中で、今回も京都府北部地域における振興を促進するプランニングに取り組ませていただくこととなりました。

2. 活動の内容

人口減少が大きな社会課題となっている現状を踏まえて、定住者を増やすことは現実的・効果的な方策であるとは言えません。しかし、そうした地域を魅力あるものにするためには、地域資源を活用した、魅力あるまちづくりを行うとともに、まずはそのことを地域住民が自分ごととして理解する必要があります。そこで、ウチ・ソトどちらの立場からも「魅力ある地域」を作るためにはどうすれば良いのか、という点に絞り、京都府舞鶴市を舞台として、ヒアリングやフィールドワークを実施いたしました。今年度は、過去 2 ヶ年と大きく異なり、中長期的に継続するための拠点づくりやイベント実施を目標に定めました。そこで、舞鶴市西市民プラザを拠点に、その指定管理者である FM まいづると協働して、地域イベントの立案を行いました。

3. 活動を通じた成果と学び

本プロジェクトへの参加学生にも、それぞれ興味・関心があり、またそれぞれに愛着の対象となる地域社会があります。今年度も、京都府・舞鶴市を訪れたことがないどころか、どの辺りにある都市であるのかすらあやしいところから活動がスタートしたものの、「自分たちの地域」と同じように、舞鶴を大切に、舞鶴の良さを考えることに努めました。決してお客様感覚で、良くしてあげよう、ということではなく、自分たちが興味を持っている、自分たちが楽しめることを、舞鶴で実施・展開するとどうなるだろう、ということに、「程良い」距離感を保ちつつ、「当事者」として関わることの大切さと難しさを学ぶことができたのではないでしょうか。また、その過程で、行き当たりばったりでは、良い提案もできなければ、フィールドワークもただの観光に陥ってしまうので、深く掘り下げてリサーチし、考え、アウトプットすることの大切さと難しさも学ぶことができたことと思います。

プロジェクト名　**地域の図書館で「大学生がやりたいこと」を実現しよう**

連　携　先　**交野市立図書館**

参加学生数　1年生：6人　3年生：1人　　担当教員　加戸　友佳子

1. 活動実施の経緯

交野市立図書館と摂南大学の連携は今年度で3年目となります。倉治図書館にて、図書館のお仕事の裏側を体験させていただき、読書推進・読書振興の一環として、プロジェクト参加学生によるイベントを企画し、実施しました。

2. 活動の内容

📖 夏休みに、図書館の仕事を体験する「インターン」に参加しました。

📖 夏休みの本の展示にて、おすすめの本を紹介しました。

今回は、「墓コス」（墓まで持っていきたいくらいのコスメ）という表現からヒントを得て、「墓本」というコンセプト（墓まで持っていきたいくらいのお気に入りの本）で展示しました。

📖 以下の全世代向けのイベントを企画・実施しました。

8月20日：子どもと夏休みの宿題をする、本にまつわるクイズ

8月21日：絵本の読み聞かせ、工作（しおり、プルバックカー）

9月27日：世代間交流カフェ

3. 活動を通じた成果と学び

📖 インターンで図書館の仕事の裏側を知り、図書館のお仕事へのイメージが変わりました。

📖 企画で達成できたこと：

出されたアイデアについて、そのほとんどを実現することができました。イベントの準備・実施においては予想しなかった問題が発生しましたが、それに対して、図書館・参加者の皆様のサポートのもと、柔軟に対応することができました。また、さまざまな世代との交流の機会を作ることができました。

📖 課題：

準備やメンバー間の連絡・連携の不足がありました。イベント参加者層についての読みが甘く、思った通りにできなかった企画もありました。

📖 総じて、達成も課題も、これからの学生生活に活きる学びになりました。

プロジェクト名	**神社から社会を考える**
連　携　先	**河内一之宮 枚岡神社**
参加学生数	1年生：3人　2年生：1人 3年生：1人
担当教員	須藤　遙子

1．活動実施の経緯

枚岡神社は、創建 2860 年以上の歴史があるとされる古社で、各旧国において最も位の高い一ノ宮です。封入作業や池の掃除、お祭りの手伝い等に加え、滝行や神津嶽元宮登拝等を経験することで、地域の結束や人びとのアイデンティティ形成に不可欠な神社の役割に対する認識を深めるのが目的です。

2．活動の内容

【5 月】崇敬会の方々と一緒に、ボランティアとして郵便物の封入作業をお手伝いしました。

【6 月】月次祭に参加しました。参加学生が男子のみだったので、特別に本殿でのお供えのお手伝いをさせていただくという大変貴重な体験でした。

【7 月】弓切り式での火おこしと装束の着付けを体験しました。装束の着付けは大変でした。

【8 月】メインイベントの一つである滝行を経験しました。禊後は拝殿にて、かなり長い瞑想と祝詞の時間がありました。古来の力を実感した禊研修会でした。

【9 月】近隣市民が多数参加する芸能感謝奉納祭と「おいしいもん市」のお手伝いをしました。いつもは静かな広い境内が、人でいっぱいになって圧巻でした。

【10 月】各町内から大小の布団太鼓台が 23 基も出る、枚岡神社最大のお祭り「秋郷祭」に参加しました。当初は見学のみの予定が、急遽神輿の担ぎ手が足らないということで、白装束を着て神様と共に町内を回りました。月末の抜穂祭では稲刈り後に、池の清掃をお手伝いしました。

【11 月】中東宮司と共に、奥宮のある神津嶽を登拝しました。頂上での 20 分のお笑い神事では、普段のストレスを忘れ、清々しく開放的な気分になりました。月末には、摂南大学 50 周年週年イベントの一環でもある第 84 回 KNS 定例会 in 摂南大学枚方キャンパスに参加。本学他学部の教員・学生をはじめ、多くの一般参加者の前で発表しました。

3．活動を通じた成果と学び

地域コミュニティを考えるうえで、実は祭りの中心となる神社の存在は非常に重要です。氏子をはじめとする地域の方々との交流や神事・祭りへの参加を通し、共働きの増加や少子高齢化等によって薄れてきた地域の結束を、神社という場から考えることのできた有意義な活動でした。

プロジェクト名	球団「兵庫ブレイバーズ」への支援実践をてこに標準思考から脱皮する「試行錯誤社会学」
連　携　先	兵庫ブレイバーズ
参加学生数	1年生：4 人・3 年生：1 人
担当教員	竹中 祐二

1. 活動実施の経緯

本プロジェクトは、プロ野球独立リーグに所属している中で、社会的起業の性質が濃い球団を選び、社会学的関与（アクション・リサーチ）の対象としています。具体的には、さわかみ関西独立リーグに所属する「兵庫ブレイバーズ」と連携・協働し、球団の日常活動に地道に参与しながら、スポーツビジネスの現状と未来を考察する、ということを目指しました。

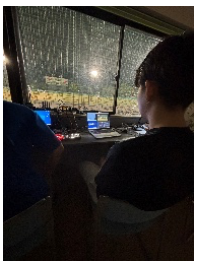
兵庫ブレイバーズとの協働は今年度で 3 年目でしたが、特に試合運営や SNS 発信のお手伝いを行うという軸を保ちつつ、今年度は単発のイベント実施に留まらず、中長期的に果実をもたらすことのできる取り組みについて考えることを目標としました。

2. 活動の内容

本プロジェクトでは、主に兵庫ブレイバーズの主催試合に足を運び、音響補助、試合配信、チケット・グッズ販売等のお手伝いを実施しました。その中で、選手、スタッフ、ファンの思いや行動を肌で理解することができ、独立リーグの「熱量」を強く感じることができました。そうした活動の前後で、九大代表の川崎社長からレクチャーを受け、個々の取り組みの背景に何があるのか、その上でチーム・リーグ・選手がどういう方向性の下で何を目指そうとしているのか、といったことへの理解を深めることができました。さらに、リサーチと球団とのディスカッションを踏まえて、応援団を結成する、応援歌を演奏する等の「応援態勢を整える」という、今後の主たる取り組みを固めることができました。

3. 活動を通じた成果と学び

本プロジェクトへの今年度の参加学生は、「野球」というスポーツとの関わり・距離感が様々で、その違いが良い影響を与えたように思います。その結果、「選手」目線に留まらない、多種多様なファン層・社会的アクターが球団・リーグ運営に関わっていることに気付けたのではないでしょうか。また、継続して本プロジェクトの貢献してくれている学生と、今年度新たに参加したフレッシュな 1 年生とが、最終的には変に遠慮し過ぎることなく、意見を出し合い、助け合うことができるようになっていたことも、FAL 演習を続けてきたからこその成果として挙げられるのではないでしょうか。そうやって、自分たちが楽しみながら、自分たち「以外」の存在を意識しながら、活動が継続されていくことの大切さ・難しさを、頭と体で学んでもらえた 1 年間になったものと思います。



プロジェクト名	**同窓会型スポーツのイベントマネジメント**
連　携　先	**全国高校野球 OB クラブ連合・マスターズ甲子園大会事務局**
参加学生数	1 年生： 7人　2 年生： 5人 3 年生： 9人　　担当教員　谷 めぐみ

1. 活動実施の経緯

全国高校野球 OB クラブ連合では、2004 年から全国の高校野球OB/OGが出身校別に同窓会チームを結成し、夢の舞台でもある甲子園球場を目指す「マスターズ甲子園」を開催しています。成人・中高年世代を対象とした生涯スポーツ文化の普及を進めていくなかで、夢への再挑戦による個々人や同窓会・世代間交流による地域の活性化、ユース世代への野球文化の継承と応援メッセージの発信等といった大会理念を形にしていくプロジェクトです。2023 年度からは現代社会学部の学生も大会運営に加わり、神戸大学や関西大学、愛知東邦大学、九州共立大学等の学生や OB クラブ連合加盟校、企業などの様々な団体や個人と連携しながら活動に取り組んでいます。

2. 活動の内容

2025 年度は主に下記の活動に取り組みました。

〇予選大会の運営支援と選手インタビュー（6月14日～8月17日@むつみスタジアム（徳島市））

マスターズ甲子園徳島大会において、出場した各チームの選手や観客に聞き取りによるインタビューを行い、インタビュー内容の編集と SNS への投稿に取り組んだ。また試合中のスコア掲示やアナウンス等の運営面も体験し、裏方として大会を支えることの魅力も学んだ。

〇大会公式ガイドブックの編集作業（9 月）

大会事務局と連携を取りながら、出場する全 20 チームの担当を割り当てて、各チームの選手情報や校正作業などに取り組んだ。

〇マスターズ甲子園 2025運営委員会（10月7日～11月4日の毎週火曜日@神戸大学）

本大会に向けて、運営委員会を構成している他大学の学生と協働しながら、当日の選手インタビューや開会式に用いるプラカードやスタッフ・ボランティアの ID パスの作成などに取り組んだ。また、今年度からは様々な部署に分かれ、運営委員のメンバーと意見交換をしながら運営方法について検討した。

〇マスターズ甲子園 2025本大会当日（11月8日・9日@阪神甲子園球場）

今年度は出場選手へのインタビューを主な活動と位置づけながら、並行して①開閉会式・甲子園キャッチボールの運営、②選手誘導、③写真撮影、④オンライン配信、⑤試合前記念撮影といった5つの部署への兼業で活動した。

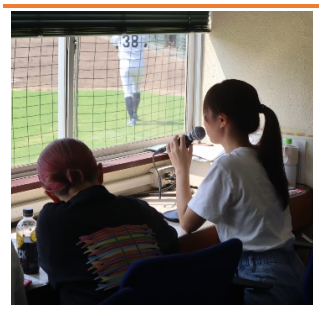
〇インタビュー・記録写真の整理とマスターズ甲子園公式インスタグラムへの投稿（11～12 月）

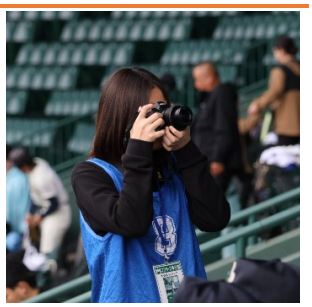
大会後はインタビューシートのデータ入力と整理ならびに記録写真のチェックを行い、公式インスタグラムに投稿する記事の作成と写真の選別を行った。

3. 活動を通じた成果と学び（学生のコメント）

- ガイドブック作成が難しかったけど頑張った。インタビューなどでのコミュニケーション力も高まりました。

- 本番ではイレギュラーが多くあったが臨機応変に対応することができた。また試合運営の難しさ楽しさを知ることができた。
- 何かの運営などをしたことがあまりなかったためどのように大会を動かしていたのかなど知ることができてとても良かった。
- 自分自身、3 年連続の参加で回数を重ねるにつれ他大学との関わりや役割を任されることが増え信頼を得ることができてきたように思う。今までは、ただ先輩の指示をうけ失敗のないように行動するだけだったが、今まで先輩が行ってくれていた活動を自分に任せていただく事があり自分も徐々に運営委員会の一員だと言う実感が強まった。リーダー的な役割を任されるようになり始め、責任感を持ちながら活動する事で自分の成長にも繋がった。
- ボランティア活動等をしてこなかった人生だったので今回のような活動は初めての経験が多く、1人では何も力になれなかったと思います。ですが、先輩方や先生方、関係者等の協力あって成し遂げられたのでとても大きな経験になりました。
- 去年の活動で出た課題や反省を、今年の大会では始めから意識して取り組むことができ、この経験から課題解決力が養われた。
- 今回、マスターズ甲子園の中でも、撮影班という一部門のリーダーを務めることになった。今まで人をまとめるような経験をしたことがなく、とても不安だった。しかし、無事やり遂げることができ、大きな自信となった。周囲の方からも感謝の言葉やお褒めの言葉を多数いただけたので、リーダーを務めて良かったと感じた。
- 今年の FAL では本来の予定とは違う、特別なチームに参加させてもらった。私は配信班に所属し、大会の YouTube 配信を行った。そこで専門的な技術を学んだ。配線を組むのに最初は時間がかかったが、最後の方は5分程度で組むことができるようになった。私は将来、広報や配信に関する職に興味があるので、今年の FAL で専門的なことを学べてよかった。
- マスターズ甲子園に参加した選手にインタビューをしたことで、コミュニケーション能力がついたと思う。また、インタビューを淡々と終わらすのではなく、話を広げようと頑張った。
- 今回初めて、野球に関わるボランティアを行うことができてこれまでもこれからも人生の中の大事な経験になった。このマスターズ甲子園の運営委員のいう経験を通して、選手の熱い思いをどうしたら引き出せるのかを考えた。はじめのインタビューでは、慣れてない部分もあったため、インタビュー用紙に書かれていることしか聞けなかったが、慣れてくると質問の答えを深掘りし、伝えたいことをしっかりメモすることができた。また、何を伝えたいのかそれを聞き逃さないと私の中でルールを決め、インタビューに挑んだ。今回、このルールをしっかり達成することができたのではないか思う。マスターズ甲子園運営委員の活動は決して楽なことばかりではなかったが、その分達成感を強く味わうことができた。





プロジェクト名　**バレーボールを通じた地域の賑わい創出とプロモーション活動**

連　携　先　**枚方市市民活動課、枚方校区コミュニティ協議会大阪ブルテオン応援団**

参加学生数　１年生：９人　２年生：９人　　担当教員　谷 めぐみ

1. 活動実施の経緯

枚方校区コミュニティ協議会内の賑わい特別委員会として発足した「大阪ブルテオン応援団」では、枚方市を拠点に活動する SV リーグ所属の大阪ブルテオンの応援活動を通して、枚方校区ならびに枚方市を対象とする周辺地域の活性化に取り組んでいます。2023年度からは摂大生も大阪ブルテオンを応援するメンバーとして、学生たちの発想やアイディアを活かしながら、応援団の方々と連携・協働し、地域の賑わいづくりを目指した活動をしています。

2. 活動の内容

2025年度は下記の活動に取り組みました。

〇枚方市について理解を深めフィールドワークを行う（6 月～9 月）

枚方市の施策や歴史・文化について学びを深めるため、市役所別館を訪問し、枚方市観光にぎわい部文化財課の取り組みについて意見交換を行った。また、枚方市文化観光協会のある鍵屋資料館を訪れ、枚方宿の歴史や文化資源について説明を受けた後、歴史街道や駅前でのフィールドワークと周辺店舗での交流に取り組んだ。

〇学内でのファン拡大活動と学外でのプロモーション活動（9 月～11月）

大阪ブルテオンの試合日程と FAL 演習の取り組みについて記載したチラシを作成（500 部）し、学内や枚方宿くらわんか五六市等でチラシの配布による広報と周知に努めた。また、当プロジェクトのインスタグラムを活用し、FAL 活動の様子について継続的な情報発信に取り組んだ。学内での大阪ブルテオンを応援するファン拡大に向け、試合観戦のプロモーション活動にも取り組んだ。

〇ホームゲーム活動の準備と実践（9月～11月）

毎週金曜日は学内でのミーティングに取り組み、①選手への応援メッセージの収集、②来場者向けのスタンプラリーの実施といった 2 つの取り組みを企画した。選手への応援メッセージは他大学が取り組むため不可となったが、来場者にスタンプラリーに参加してもらえるよう積極的に声掛けをし、フィールドワークで交流を重ねた枚方宿の店舗や観光協会のグッズを景品として用意するなど、応援団の協力のもと3回のホームゲーム活動に取り組んだ。

3. 活動を通じた成果と学び（学生のコメント）

- FAL 演習の活動を通して、自分たちの力だけではできることが意外と少ないという現実を知った。活動の中ではこうしたらよいのではないかという案自体はいくらでも考えることができたが、それを実行に移すためには、周囲の協力や他者との連携が不可欠であることを実感した。また、限られた立場の中で自分に何ができるかを考え続けることが成長できたと感じた。
- とても基本的なことであるが、報連相の大切さについて深く学んだ。意見の齟齬が起き、それが結果的にホームゲーム活動の縮小につながってしまった。事前のアポイントメントは必須であるが、それに加えて意識的に連絡を取ることの重要性を再確認した活動であった。

- 自分が頑張ったことは学年が違う先輩たちと仲良く関わることです。FAL 活動でしか会わない先輩たちに対して、どのような関係づくり、話し方などをすごく考え、お互いの思うことをしっかり言えるような関係性ではないと、どちらか一方的なものになってしまうので、そうならないように、自分たちからもしっかりと意見を出すことを頑張りました。成長できたことは、企業の方などに実際プレゼンテーションをすることは自分にとっても初めての経験で、これから社会に出た時に必要な力になってくると思うので、それを体験できたことは自分の中で大きな成長につながったと思います。
- 地域の方々とコミュニュケーションを取ることによって、見ず知らずの人達と話すコミュニュケーション能力が身についたと思う。またホームゲーム活動をする上で、様々な課題が挙げられた中、その課題をどのようにして解決していくのか自分たちで考え、解決に導く課題解決能力が身についたと感じた。
- FAL 演習の活動を通して、バレーボールを軸に枚方市の魅力を発信する取り組みに積極的に参加した。鍵屋資料館の見学や五六市の視察を通して、地域の歴史や食文化、街並みといった多様な魅力を知り、それらが観光や地域活性化につながっていることを理解できた。また、ワークショップやホームゲームでの活動では、仲間と意見を出し合いながら、地域や大阪ブルテオンの魅力をどのように伝えるかを考え、企画を形にする経験を積んだ。これらの活動を通して、自ら考えて行動する力や、目標に向かって計画的に取り組む力が身につき、スポーツを通じて地域を盛り上げる視点を持てるようになった。
- ホームゲーム活動を行ってみて浮き彫りになった課題を次のホームゲーム活動で活かせたことが自分の中で成長だと思った。いつも反省しても忘れてしまうことがあったが、今回はしっかりと覚えて実践できたので良かった。
- この活動を通して、プレゼンテーション能力や地域に対して向き合う意識を身につけることができた。FAL のメンバーと協力し、1つの目標について努力するグループワークの大切さを学んだ。また、地域の方々と話す機会があり、自分の考えの浅さを知ることができた。ワークショップの際には、意見を言語化する能力が乏しいことを再確認した。ホームゲーム活動を行うにおいて、予想外のことが起こったとしても臨機応変な対応が求められたため、柔軟性が高まったように感じた。
- 目的目標に向かうために何をして行けばいいか組み立てて準備をすることや企業の方々とお話をしたり自分たちのやりたい事を提案したりする時にどのようにして伝えるかなど社会に出て使うような力が身についた。

プロジェクト名　**あなたの存在を、社会にとって価値あるものにする**

連　携　先　**株式会社　特殊高所技術**

参加学生数　1年生：４人　　担当教員　浅野 慎一

1. 活動実施の経緯

現代社会で求められているのは、マニュアル化されたタスクを実行することではなく、自身で課題・目標を設定し、価値を創出する力である。本プログラムでは、ゼロベースから学生自身が自らの目標を設定することを重視した。種々の議論・葛藤の末、FAL を受け入れてくださっている民間企業にインタビューに行き、そこで FAL の社会的意義や解決すべき課題を調べ、具体的な提案を構想することとなった。

2. 活動の内容

前期から 10 月頃まで、学生が課題・目標の設定について議論した。
その後、13 社の FAL 受け入れ企業に、主に下記の項目についてインタビューを実施した。
（1）学生にどのようなことを学ばせたいか。　（2）FAL を受け入れた（企業にとっての）メリット。
（3）FAL を受け入れた（企業にとっての）デメリット。（4）大学への要望、改善すべき点。
インタビュー結果を分析、改善のための提案をまとめた。
現代社会学部の FAL 委員会に、調査結果と提案を報告し、改善策について協議した。

3. 活動を通じた成果と学び（受講生の声）

・FAL、受け入れ先企業、学生の現状をふまえ、FAL 演習プログラムで実施すべき課題を、自ら設定することができた。
・13 社に対するインタビュー調査を実施し、調査経験を積むとともに、貴重な情報を得られた。調査結果を自ら分析し、問題の所在を明確にし、対策を考えることができた。FAL 委員会に申しいれ、FAL の改善に向けた実践を行うことができた。
・企業が学生に FAL を通してどんなことを学ばせたいかを知った結果、学生が主体的に動くことで学生にとっても企業様にとってもプラスになることがわかった。
・大学内の授業・学校生活では学べないことを知ることができていい経験になった！
・学生の想い・アイディアが面白いと言っていただけ、さらに積極的・主体的に取り組もうと思えた。
・学生からの提案は、次の通り。
①同じ教室でも FAL 活動ができるようにする⇒自然な形で学生・企業同士の交流を生む。
②ガイドラインの作成⇒経費、時間、作業内容など、検討する際の指針を作る。
③経費支給の仕方を変える⇒必要経費、用途に応じて支給する金額が検討される。
④企業同士の交流の場を設ける⇒FAL での悩み、アイデアを交換できる機会を創る。

プロジェクト名	工場はまちのエンターテインメントだ！―門真のものづくりの魅力を伝える
連　携　先	門真市市民文化部産業振興課、門真市内の中小企業
参加学生数	1年生：5人　2年生：1人　3年生：4人　担当教員　加戸　友佳子

1. 活動実施の経緯

FactorISM（ファクトリズム）は、2020 年に始まった、大阪の町工場によるオープンファクトリーイベントです。その中でも、門真市内の工場が参加する FactorISM 北エリアでは近年、周辺の大学・高専・高校との連携を進めています。摂南大学との連携は今年 2 回目となります。

2. 活動の内容

門真市役所のご協力のもと、門真市のものづくりや FactorISM について学び、工場を見学しました。また、**大阪・関西万博**や**大阪国際大学「優花祭」**にて行われた関連イベントに一部学生が参加しました。学生たちは、**（株）広伸・（株）ミクロシステム・（株）三和歯車・森脇鉄工（株）**の4企業に分かれ、広報や FactorISM 本番の活動に参加しました。この成果を関連する企業の皆様の前で発表し、フィードバックを頂きました。

3. 活動を通じた成果と学び

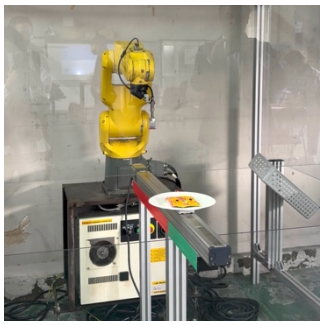
それぞれの企業で活動した学生たちの成果・学びへの振り返りは以下のとおりです。

【株式会社　広伸】 広報活動に携わり、ものづくりの現場の魅力と情報発信の難しさを学びました。工場見学や溶接体験を通して技術や現場の工夫を体感し、若年層へ向けた動画制作に注力しました。限られた公開期間での挑戦となりましたが、その中でより拡散するために早期の企画や逆算したスケジュール管理が不可欠だと実感しました。ものづくりの現場と広報活動の双方を体験できたことは、主体的かつ計画的に物事を進める力を養う重要な機会となりました。

【株式会社　ミクロシステム】 提案を採用してもらえることの喜びや、チームに協力することにあたって大切なこと、連絡を取り合い活動状況を細かく共有することの大切さを学ぶことができました。他にも、幅広い世代の来場者の方とコミュニケーションを取ったことで、ものづくりの楽しさを伝える方法や、このイベントを楽しんでもらうための工夫なども学ぶことができ、来場者に楽しんでもらえることの嬉しさも知ることができました。

【株式会社　三和歯車】 三和歯車様との活動では、専門的な加工や機材などの情報を整理し、分かりやすく資料にまとめることや SNS 用の動画・スライドの作成に取り組みました。専門的な内容をそのまま伝えるのではなく、相手に伝わる言葉へ言い換える力の重要性や、どのような表現が人の目に留まりやすいのかを学びました。また、どのような方がイベントに参加なさるのかを客観的に分析し、ターゲットを意識して発信内容を工夫することで、伝える力と企画力を身につけることができました。

【森脇鉄工株式会社】 森脇鉄工はグラビア印刷用のシリンダーを制作している工場で、従業員の方々の技術や最新の設備を駆使して、0.01mm 単位での精度を実現しています。私は実際の現場をこの目で見て、従業員の方に対して「かっこいい」と感じました。社長と 2 人でお話をする機会があり、貴重な経験になりました。きてくれたお客様が楽しそうに工場見学をしているのを見て、なぜか自分まで嬉しい気持ちになりました。



写真：左から順に、（株）広伸・（株）ミクロシステム・（株）三和歯車・森脇鉄工（株）

プロジェクト名 **中小企業が抱える課題を”企業ドクター”として解決するためには**

連　携　先 **株式会社フォーバル**

参加学生数　1年生：2人　3年生：3人　　担当教員　小池 高史

1. 活動実施の経緯

日本の企業のうち、9割以上を占める中小企業は、大企業に比べて雇用創出効果が高く、地域に根ざした企業も多いため、地元の雇用を支えています。日本の従業者の約 7 割が中小企業で雇用されています。また、大企業が手がけないようなニッチな市場や地域に特化した製品・サービスを提供することで、消費者の多様なニーズに応えています。さらに、大企業は中小企業の優れた技術やノウハウを活用し、新たな製品やサービスを開発することで、日本の産業競争力を高めています。しかしながら、営業・販売力や人材確保の面で、課題を抱えている中小企業も多くいます。

そのような中小企業にたいして、GDX（グリーン・デジタル・トランスフォーメーション）を提案することで、課題解決を行っている株式会社フォーバルの業務に学生たちが参加しています。

2. 活動の内容

参加した学生たちは、まずオフィスにおいて、ビジネスマナーを含めて、業務に参加するための研修を受けます。そのうえで、中小企業による DX・GX の成功事例を知り、事例を分析し、プレゼンテーションを行いました。

3. 活動を通じた成果と学び

1年間を通した企業での経験のなかで、中小企業において人手不足と新規顧客の開拓が課題になっていること、DX（デジタルトランスフォーメーション）を使うことで、データを使った作業の効率化や顧客に沿った営業ができるようになること、GX（グリーントランスフォーメーション）に取り組むことによるイメージの向上で新規顧客を獲得することへ繋がることを理解することができました。

また、ビジネスの現場で実践をとおして学ぶことで、説明資料を作成する力や相手に説明する力を身につけることができました。

プロジェクト名　**果物の生産と消費の現場を知る―果物好きの若者を増やしたい！**

連　携　先　**株式会社万果**

参加学生数　1年生：8人　　担当教員　中澤 芽衣

1. 活動実施の経緯

株式会社万果は、おもに青果物を扱っている仲卸の企業です。日本では、生産地と消費地がどんどん離れていくなかで、若者の「食」に対する意識は薄れる一方です。物価が高騰するなか、果物は嗜好品として扱われ、果物離れは加速しています。FAL 演習では、果物の生産から消費までの流通の流れを学びながら、若者の果物離れを食い止めることを目的に活動を実施しました

2. 活動の内容

今年度は、「SNS 動画の作成」と「イチゴ生産地への訪問」の 2 つに取り組みました。

〇SNS 動画の作成

株式会社万果様から「若者の目を引く、果物を扱った SNS 企画を考えてほしい」という課題を与えられました。学生たちは 2 つのグループにわかれ、それぞれのグループが利用する SNS の媒体や、若者の目を引く投稿内容について調べ、議論しました。両グループ、若者の利用率が高い TikTok に投稿することを想定し、果物をつかった動画を作成しました。

〇香川県綾川町におけるフィールドワ―ク

2026 年 1 月 14～15 日に、香川県綾川町にてフィールドワークを実施しました。香川県農業協同組合中讃営農センターを訪問し、イチゴ生産者の方と意見交換会を実施しました。生産者の方から、農業の大変さや楽しさ、農業従事者の高齢化について現場の声を聞くことができ、学生にとっては大変貴重な経験となりました。

イチゴの収穫の説明を受け、学生たちはイチゴ収穫のお手伝いをさせていただきました。イチゴは 1 つ 1 つ手作業で収穫し、パックに詰めるため、大変時間と手間がかかります。イチゴの収穫体験を通じて、学生たちは自分たちの身をもって、農業の大変さを知ることができました。

3. 活動を通じた成果と学び

動画の企画を考える際、自分たちで必要な物品や撮影場所、タイムスケジュールなどを考えなければいけませんでした。話し合いを進めていくなかで、モチベーションの差が生まれたり、予定が合わなかったりして、苦戦している姿を見かけましたが、最終的にはみなで力を合わせて、素晴らしい動画を作成することができていました。また、生産者の方が 1 年間大切に育ててきたイチゴの収穫を体験させていただいたことで、学生たちの食への意識が大幅に変わったように感じます。次年度も、日本における「食」に対する意識を高められるよう活動を実施していきたいと考えております。

プロジェクト名

田舎暮らしと新しい働き方の探究・発信
―「稲武（いなぶ）」で考える、持続可能な地域とは―

連　携　先　**トヨタケ工業株式会社、OPEN INABU**

1. 活動実施の経緯

稲武は、岐阜県と長野県の県境に位置する、愛知県豊田市の中山間地域であり、いわゆる「限界集落」とされる地域でもあります。この稲武には、自動車用シートカバーを製造するトヨタケ工業株式会社の本社があります。同社の横田社長は、自社の将来を見据えると同時に、地域が抱える過疎化・高齢化の課題に向き合うため、移住促進と地域振興を目的とした「OPEN INABU」を立ち上げました。そこで提案されているのが、「週3日工場勤務・週2日ガイド」という新しい働き方です。

学生たちには、実際に稲武での生活を体験しながら、地域課題と横田社長の取り組みを学び、田舎での暮らしの中でワークライフバランスをどのように実現できるか、そして稲武を持続可能な地域として存続させるために何が必要かを考えてもらうことが、本プロジェクトの目的です。

2. 活動の内容

(1)トヨタケ工業での活動

トヨタ生産方式やアップサイクルについて学び、工業用ミシンを使ってものづくりを体験しました。

(2)OPEN INABU PROJECT での活動

稲武観光協会の方々から蕎麦と五平餅の作り方を教えてもらい、一緒に作って食べました。また、農事組合法人「大野瀬 温（ぬくもり）」の方々から稲武での農業の様子や自然環境の現状を見せていただいたり、移住者の方々から稲武への移住のメリットとデメリットについてお話を聞いたりしました。

(3)稲武の自然とマウンテンバイクの体験

名倉川で水遊びをしたり、梨野不動滝などの名所を観に行ったり、山間地の道をマウンテンバイクで走ったりと、稲武の自然をさまざまに体験しました。地理を活かしたヤナの見学にも行きました。

(4)稲武を活性化するためのアイデア出し

稲武での体験と活動を踏まえ、稲武が活性化するために、移住促進のために、どんな工夫をしたら良いかのアイデアを出し合いました。“外部”の人間だからこそ気づくこともあります。

3. 活動を通じた成果と学び

昨年は台風の影響で冬になりましたが、今年は8月に3泊4日で実施することができました。8月までの間は、稲武についてデスクトップリサーチをしたり、社長とオンラインミーティングをしたりしながら準備を重ね、9月以後は、稲武に人が集まるためのアイデア出しのためにミーティングを重ねました。

ふだん大阪の“都会”住まいの学生たちは、現地の自然の豊かさと人の温かさを感じ、田舎暮らしに魅力を見出したようです。なかには、FAL 活動後に、バイクで（！）稲武を訪れた学生もいました。ただ、交通アクセスや買い物など日常生活における諸問題が移住を難しくしていることも痛感しました。国道が交差す道の駅は週末多くの来訪者があるので、いかにその“外”に出向いてもらうかが重要だと考えたようです。

学生たちは、SNS 発信による知名度向上のほか、デパート等での物産展の開催や立地を生かしたアス

レチック施設の建設、山間地でのごみ拾い等によってもらえる地域通貨など、さまざまにアイデアを出していました。新しいものを考案しようと懸命に取り組みましたが、実現可能性が思考を妨げる面も見受けられました。今後は、行政への働きかけも視野に入れて活動していく必要があるという意見もありました。

トヨタの「かんばん方式」の説明を受けています。

工業ミシンを使って、自動車のシートカバーの廃材でペンケースを作りました。

美しい川ならでは！ヤナの見学にも行きました。

ツアーガイド（左）の案内のもと、マウンテンバイクトレイルツアーに参加しました。

つぶした米に甘めのたれを塗った五平餅（上）と、八割蕎麦（下）。観光協会の方々に教えていただき一緒に作った郷土料理です。

プロジェクト名 **大阪の“凄い”中小メーカーの技術力を知ってもらい次世代へ繋げる**

連　携　先 **株式会社ユーエイ**

参加学生数　1年生：4人　2年生：4人　　担当教員　山本 圭三・竹端 佑介

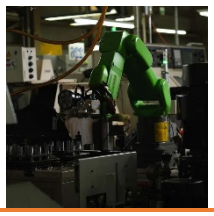
1. 活動実施の経緯

周知のとおり大阪地域には、日本屈指の技術力を持つ企業がたくさんあります。技術力はかなり高く、業績も安定している企業が多い一方、そのほとんどが中小企業であるため認知度は決して高くないのが現状です。そのため企業の採用選考には人があまり来ず、どこも採用活動に苦労をしており、その点で見れば全体として緩やかに産業が衰退に向かっているというのが現実です。他方で学生の側からみれば、大手企業を目指す学生は多いですが、そこで活躍できるのはごく一部の者に限られているのが現実です。それゆえ、一旦大手企業に入ったもののつらい現実に直面した人びとが中途転職市場に多く溢れる、という流れもみられています。従って現在では、採用選考における学生と企業のニーズがうまくいっていない、いわばマッチングがうまく機能していない状況にあるといえます。こうした事態を、大阪地域を起点として変えていきたい、というのが本プロジェクトの目的です。

2. 活動の内容

2025 年度は大阪府内の中小企業を重点的に訪問し、その技術力の高さを皆さんに広めることを主な活動にしました。まだ広く知られていない中小企業の卓越した技術や独自の強みを知り、それを多くの人々に伝える、そのことでものづくりの魅力を発信し、企業の発展や業界の活性化にも貢献することを目指すことをねらいとしていました。

具体的には、日新興行株式会社、瑞光、株式会社ユーエイ、MOBIO 東大阪ものづくりセンター、山本精密株式会社、共和鉱業株式会社といった企業さまを訪問しました。



3. 活動を通じた成果と学び

実際に企業を訪問することで、製品のこだわりや企業の理念を肌で感じることができ、カタログやネットの情報だけでは得られない多くの気づきを得ることができました。

活動を通して、技術力を広く知ってもらうためには、次のような取り組みをすることが必要になるのではないか、と考えられました。

1　発信を増やす：SNS や動画、ホームページで技術の内容や成果を分かりやすく紹介する。
2　体験の機会をつくる：工場見学、ワークショップ、体験型イベントを行い、実際に触れてもらう。
3　教育との連携：学校や大学と連携し、授業や課外活動で技術を学ぶ機会を提供する。

プロジェクト名	**東日本大震災・福島原発事故の被災地で考える「地域の未来」**
連　携　先	**NPO 法人コースター、福島大学地域未来デザインセンター**
参加学生数	1年生：４人　２年生：６人 ３年生：２人　　担当教員　江口 怜

1. 活動実施の経緯

本プロジェクトは、担当教員の江口がかつて、2011 年発災の東日本大震災・福島原発事故の被災地で学生ボランティアと活動に取り組んだ際の経験と人脈を生かし、震災・原発事故の経験を関西在住の大学生に伝え、地域の未来を考えることを目標に立ち上げた。2 年目の本年度は、福島県を拠点に多様な被災者支援・復興・地方創生活動等に取り組む NPO 法人コースターの坂上英和氏に加えて、福島大学の藤室玲治特任准教授・松原久研究員の協力を得ることができた。

2. 活動の内容

事前の準備・学習を経て、9 月 7 日から 10 日まで 3 泊 4 日で現地活動を行った。

1 日目：東日本大震災・原子力災害伝承館、震災遺構浪江町立請戸小学校の視察

2 日目：金成美怜さん（福島県出身・東北芸術工科大学生）とのワークショップ、大熊町学び舎ゆめの森にて放課後児童クラブの子どもと交流ボランティア

3 日目：木村紀夫さん（大熊未来塾語り部）のガイドで中間貯蔵施設等を視察、大熊町学び舎ゆめの森にて放課後児童クラブの子どもと交流ボランティア

4 日目：東京電力廃炉資料館の視察

秋には、摂南大学も深く関与する関西ネットワークシステム（KNS）定例会でプレゼン報告を行う等、原子力災害被災地の現状について啓発を行うことができた。

3. 活動を通じた成果と学び

本年度は、福島大学との連携により原子力災害の被災体験者の話を聞くことができ、また原発事故後に長く全町避難を強いられていた大熊町で 2023 年に設けられた義務教育学校学び舎ゆめの森で子どもと交流するボランティア活動を行うことができたことで、より深く被災のリアルを体感することができた。また、建物を直すだけでなく、地域の人々が元気になることが復興であること、次の誰かの命を救うために「伝える」という行為が重要になることなど、新たな学びを得られた。学生自身が活動内容の計画に深くコミットし、現地で率先して行動できた点も貴重な学びの経験になった。

プロジェクト名	**能登半島地震被災地における復興支援ボランティア**
連　携　先	**被災地 NGO 協働センター**
参加学生数	1年生：４人　２年生：４人 ３年生：２人　　担当教員　江口 怜

1. 活動実施の経緯

被災地 NGO 協働センターは、1995 年の阪神・淡路大震災を機に誕生し、「最後の一人まで」の理念に沿って、これまで数多くの被災地で被災者に寄り添う支援活動を行ってきた団体である。担当教員は大学生時代よりご縁があり、2024 年発災の能登半島地震においても七尾市に現地拠点を構えて活動していた。そうした中で、震災後に個人ボランティアとして能登半島地震被災地で活動してきた学生から FAL の枠組みで組織的に活動をしたいと相談を受けたことから、被災地 NGO 協働センターに相談し、新規プロジェクトとして被災地支援に取り組むことになった。

2. 活動の内容

まず、本格的な活動開始前に、担当教員と学生２名で現地視察を行い、連携先との顔合わせ及び七尾市の仮設住宅で物資配布のボランティア活動を行った。

その後、現地と打ち合わせを行いつつ、８月８日から 11 日の３泊４日で現地ボランティアを行うことになった（天候の都合で 11 日の活動は中止）。メインの企画として、夏休み中の現地の子どもが安心して遊ぶことのできるイベント「目指せ・遊びマスター～初の陣」を考案し、マルシェや物資配布等の他の活動日と合わせて七尾市の拠点で開催することになった。また、３日目は奥能登に位置し地震後に水害被害も受けた輪島市に移動し、被災地 NGO 協働センターさん主催のマルシェへの参加と、清掃やがれき類撤去等を行う2グループに分かれて活動を行った。

秋には、学生が出身校の常翔啓光学園中学校・高等学校の教員と相談し、ボランティア経験を生かしたワークショップを学生主体で企画実施するなど、大阪での啓発活動にも取り組んだ。

3. 活動を通じた成果と学び

能登半島地震に関しては関西でも揺れを感じられ、発災から間もないことから学生の関心も高かった。やはり、現地を訪問し、被災地の現況を連携先支援団体から教えていただいたり、復興途上の街並みを目にしたり、被災経験者と交流をすることで、被災地のリアルを肌で感じとることができたことは、大きな学びになったようだ。また、自分達で企画を準備・運営する上での注意点、チームづくりの難しさ、傾聴の方法などについて学ぶことができた。今後も、継続した支援の形を検討したい。

プロジェクト名	「ふるさと門真まつり」を盛り上げよう ―イベントの企画・運営のノウハウを学び、醍醐味を味わう―
連　携　先	門真市役所 地域政策課ほか
参加学生数	1年生:9人 2年生:6人 3年生:1人
担当教員	堀田 裕子 竹端 佑介

1. 活動実施の経緯

門真市では、地域の夏祭りである「ふるさと門真まつり」に力を入れています。本プロジェクトは、この祭りの運営に学生が協力させていただきながら、学生にしかできないことや、どのようにすれば円滑な運営が可能となるのかを考え、実際の現場での実践を通して社会を経験するのことを目的としています。

今年度は、昨年度の履修生が提案したイベント案を具体化し実行に移すという課題に、1年生、2年生、3年生、合わせて16名が取り組みました。うち2名は、昨年度からの継続参加となりました。

2. 活動の内容

「ふるさと門真まつり」に出店するお化け屋敷のイベント案を具体化し、実行に移しました。

(1)お化け屋敷を実現するための企画

お化け屋敷を一から制作するにあたり、まず具体的なアイディアを考えていく必要がありました。子どもから大人までが「怖いけれど楽しい」「また来たい」と感じられるお化け屋敷にすることを目指し、最初にテーマ設定を行いました。次に、お化け屋敷の仕掛けや、来場者をどのように怖がらせているのかといった演出の仕組みを理解するため、生駒山遊園地にあるお化け屋敷の視察を行いました。視察を通して、具体的な怖がらせ方のイメージをつかむとともに、コンセプトの重要性や、その実現に必要な備品(説明書など)について学びました。こうしたアイディア出しや視察を踏まえ、会場の間取りに合わせた通路の構成(仕切りなど)や、場所ごとの仕掛け(どこを見ても見られているように感じさせる錯視、壁が揺れる演出、覗き込んだり差し込んだりすると何かが出てくるといった恐怖感を与える仕掛けなど)、さらに必要な道具(ペットボトル、新聞紙、血のり、音響機器など)について具体的に検討しました。

(2)お化け屋敷「閉館後の美術館」の実施

お化け屋敷は、会場が昨年度から変更されたことを踏まえ、建物の特性に合ったイメージとお化け屋敷としての恐怖演出を融合させ、「閉館後の美術館」というテーマを設定しました。来場者には、閉館後の美術館を見回るアルバイトの仕事をしてもらう設定とし、学生がアルバイト内容について説明しながら入口まで案内した後、アルバイト役のお客様のみが入場する形式としました。お化け屋敷の実施直前までリハーサルや改良を何度も行いました。

(3)次年度に向けての企画

お化け屋敷の企画と実行、反省をもとにして、次年度に向けた企画を計画し、実行委員会で企画案をプレゼンすることを行いました。

3. 活動を通じた成果と学び

前年度の経験を有する上回生の指揮のもとで作業を進めることになりましたが、当初は上回生と下級生との間で十分な連携が取れず、作業が円滑に進まない場面が多くみられました。しかし、空き時間を活用した人形や小物などの制作活動を通して、学生同士が互いに協力し合う姿勢を学んでいきました。その後、開始時間直前までリハーサルや設定の改良を重ね、8 月 9 日(土)の当日を迎えました。

「閉館後の美術館」は、12 時から 18 時までの約 6 時間で延べ 972 人のお客様に来場いただきました。今年度も 1 時間以上の待ち時間が発生するほどの人気となり、「まつり」において高い集客を誇るイベントとなりました。

本活動を通して、学生たちは計画性と協調性の重要性を学びました。また、企画を具体化していく過程においては、さまざまな立場の来場者を想定する視点や、「遊び心」の必要性、さらに不測の事態への対処の重要性についても実感しました。当日の達成感と喜びは、これまでの努力と苦労の積み重ねに比例するものであったと感じられました。

「まつり」終了後には、市役所関係者と連携しながら次年度のイベント案を検討し、実行委員会において発表を行いました。その過程を通じて、企画立案においては実行可能性と具体性が不可欠であることを学びました。

美術館の目玉となる壺作りの様子。壺の中を覗くと何かが・・・。
壺やさまざまな仕掛けを通して、多くのお客様の驚きや笑顔を頂きました。

手作りのお化け人形。

本物の人間のように見せるため、関節の動きに工夫を凝らすなど、演出面で多くの苦労がありました。

様々な仕掛けも施しました。

呼び込みも頑張りました。

沢山のお客様に来場いただき大成功！
反省点や改良点を見つけ、次年度に活かしていきます。

[参考資料]FAL(フィールド型アクティブ・ラーニング)科目の沿革

■2023 年度(令和 5 年度)

FAL(フィールド型アクティブ・ラーニング)科目は、2023年現代社会学部の設置とともにスタート。このうちFAL演習は、教員の調査研究フィールドや大学の近隣自治体などと連携にむけた協議を行い、初年度より41件のプロジェクトを実施することとなった。

- FAL委員会の設置(講師3名、助教2名)
- 中間報告会、成果報告会の実施
- 活動報告書の作成

【実施状況】プロジェクト数:41(50)件、参加学生数:210人

■2024 年度(令和 6 年度)

今年度は新たに、事前の情報提供やプロジェクトごとの説明会(任意)を「FAL WEEK」として開催した。また、全体キックオフミーティングおよびプロジェクトごとの顔合わせも行った。

- FAL委員会の継続(講師3名、助教2名)
- 中間報告会、成果報告会の実施
- 活動報告書の作成

【実施状況】プロジェクト数:45(51)件、参加学生数:373 人(キックオフ時)

■2025 年度(令和 7 年度)

昨年度からのプロジェクト継続参加学生が最多の46名となり、プロジェクトの継続的な運営が実現しつつある。 中間報告会はポスター展示を基本とし、成果報告会は2部制にて開催した。

- FAL委員会の継続(講師3名、助教2名)
- 中間報告会、成果報告会の実施
- 活動報告書の作成

【実施状況】プロジェクト数:51(54)件、参加学生数:457 人(キックオフ時)

2025 年度　摂南大学現代社会学部 FAL 演習活動報告書
2026 年 3 月 31 日発行
発行所　摂南大学現代社会学部
〒572-8508　大阪府寝屋川市池田中町 17 番 8 号